

王鐘声事蹟二攷

吉川良和

はしがき

二〇〇七年は、中国に新劇が生まれて百周年目にあたる。(註し) 中国人留学生たちの文芸クラブ春柳社が、一九〇七年二月に神田の中華キリスト教青年会で『椿姫』の一部を演じ、六月には東京の本郷座で『アンクルトムの小屋』を上演した。これに呼応するように、同年、国内でも王鐘声らが上海において、夏に春陽社を組織して秋に蘭心劇場で同名の劇を公演した。この年が中国新劇の生誕年といわれているゆえんである。王らのはすでに新劇が市民権をもっていた日本という異国で、かつ俳優も観客も新劇を見慣れていた環境下で上演した春柳社と違う。それまで新劇というものを全く見たことのない観客と演じたことのない俳優が、この新しい様式をいかに自国の演劇の中に受け入れるかという文化古国中国の産みの苦しみを体験せねばならなかった。そして、覚醒すべき民衆と旧劇役者の蒙昧、そうした時代の状況下で、不撓不屈の精神をもって、中国近代演劇史に独得の光芒を放った王鐘声の事蹟を、拙論はもう一度さぐって見ようとしてみるものである。

王鐘声は国内で最初に新劇を営業劇場で公演したばかりでなく、また当時存在しなかった新劇の人材育成をする学校の設立者の主要人物でもある。さらには、天津・北京などの北方大都市に新劇を初めて広めた人であるのだから、中国近代演劇史には必ずその名が現れる。王鐘声が一九一〇年に上海公演した時の新聞広告に「新劇を初めて創った鐘声」と称し、また刑死して一年後の新聞には「鐘声、即ち王熙普は新劇界の鼻祖である。同時に、あるいは先だつて新劇をしたものは国内で固よりないわけではない。だが、専門に稽古し、久しく行い、広く及ぼし、衆に広めた者は、鐘声が誰よりも先である」と記すから、^(註2) 当時から新劇の創始者と見なされていたことがわかる。それは、彼が国内で初めて新劇を公演したことに重要な意味を持っていたからであろう。

筆者もその事蹟を論述したことがあるが、あれから三十年を経た今日でもまだ謎が多い。^(註3) その理由は、いくつかが考えられる。活躍した時期が清末という二十世紀初頭の革命期にあたり、彼も革命に加担して自分の出自をあまり明らかにしたがないし、民国成立を待たずに刑死したこと。彼独得の個性のためか、接した人々に悪印象を与えたフシもあり、そうした人達の回想録にも詳述がないこと。加えて、舞台に人々の耳目を惹起するために自分を誇耀しようという意識から履歴を飾る心理も有していたことなどである。とはいえ、その彼の果たした歴史的意義は、やはり近代中国演劇史で全く無視できない。初攷の後、聊か得るところもあり、拙論では、前稿を補充しながら述べたいと思う。

一 上海劇界入り以前の王熙普

王鐘声の本名は王熙普というのが正しいようだ。^(註4) なぜなら、彼が当時の新聞に発表する書簡や意見書には必ず

自身で「王熙普」と明記しているからである。^(註5)熙普は同音異字の熙甫、希甫、錫甫などもあり、また鐘声の南方音に近い「宗成」もみな耳で聞いた宛字であろう。生まれは河南としているものが多く、出身は新聞に載せるときは浙江上虞として、北京では浙江会馆に寄宿していた(後述)。^(註6)鐘声と称したのは、鐘の声で「国民を覚醒しあらゆる祖国の弊俗を打破させる」という趣旨であるという。^(註6)

上海劇界入り以前の王鐘声については、歐陽予倩や徐半梅の回想録にある記憶も、聊か模糊としている。ややまとまった経歴を記したものに、劍影客『天津名伶小伝』^(註9)があつて「代々の名家である。父は雲南で役人をし四人の兄もみな仕官している。幼くして父を喪い母について十二歳まで習い、母が亡くなるとよその先生について学んだ。十三歳で文名が江南に響いた。『瀛寰志略』や掌故の書籍を好んで読み漁り、独創的な文章を書いた。十四歳で上海に行き教会学校で学び、独仏語を勉強して四年で双方に通じた。一八九八年、ドイツへ私費留学し得來伯的^(註10)西大学で八年して学士となり一九〇六年帰国して南北各地を巡った。一九〇七年には広西の長官の部下となり法政学堂の監督、および洋務局の局長などの職に就いたが、間もなく辞職して上海に行った」と上海に再来するまでの経歴を記す。これには恐らく王熙普自身の誇耀が入っているように思われるし、劍影客の思い入れもあろう。鐘声自身から直接聞いたかも知れないが、また当時は演劇改良を推進する人をもちあげる傾向もあつた。例えば、劍影客は、「鐘声先生伝」と他の役者の伝にはない「先生」をつけて、尊崇の念を表わしている。それは、名家出身で科挙に应试して役人になれたし、留学生の学士は科挙試験合格相当の資格が与えられていたのに、当時雲泥の差があつた「汚賤の優伶」と一緒に活動しているのは、社会改良に熱心な奇特な志士でなければ、どうしてできようかと「贅」に述べ、シェークスピアやヴォルテール、そして川上音二郎が今も崇敬されているが、なんとわが国にもこれに匹敵する人が現れた、と結んでいるのである。つまり、被差別民であつた役者にま

身を落として社会のために犠牲になってくれたという念がこの伝の作者にはあった。

ところで、鐘声の帰国後の広西での行動については、李任仁の回想があつて、それにはこう記す。王希甫（即ち「鐘声」）は同盟会員で、桂林法政講習所の責任者をしていた。一九〇六年皇太后の誕生日と立憲準備の慶祝行事で、大胆にも「立憲はいかさまであり、清朝が去らなければ中国に希望はない」と演説したので広西長官で講習所所長の林紹年は鐘声を辞職させたと述べている。^(註1)だが、歐陽予倩の回想には、「湖南で教師をしていて、王希甫と名乗っていた。二人の女学生が彼の後をついて行ってしまったので、親族が誘拐したと訴えた。逮捕状が出たため、広西に行き法政大学で教えていたそうだ。私が結婚した年に桂林で、彼の長い演説を一度聞いたことがある。それからは、湖南の事件のことがあるので、彼は逃げて上海にやってきたと思つたら、新派の女方に変身していた」（十五頁〜十六頁）と、上海以前の湖南、広西でのことが述べられている。

留学に関しては、歐陽予倩の回想に「多くの国に行き特にドイツは長いとっていたが、彼は行ったことなどないという人もいた」（十五頁）とある。欧陽や徐には、医学を習ったとか、法律を勉強したとかいい、北京初公演の時はアメリカの美術学校で美術をやったとう触れ込みであった（後述）。梅蘭芳や萬物博士は日本留学と聞いている。^(註2)日本留学については、これも証拠がないが、もし一九一〇年以前に来日していたら、『天津名伶小伝』に言及しないはずはなからう。該書の出版以後、北京などで公演してから漢口に向っている。その漢口『中西報』に「東西留学 王鐘声」と広告が出た。ここに東（日本）西（西洋）へ留学したとあるが、^(註3)同紙の五月二二日には「十四歳で欧州に留学した」とだけ述べていて、^(註4)日本留学については全く言及していない。そして、上海で早期に協力しあった日本留学生徐半梅も、回想録で一度も鐘声が日本留学生とはいっていないし、劉木鐸や陸鏡若などの日本留学生で実際芝居に携わったものと共演するときには、日本留学を標榜しないのも疑いを濃くする。

とにかく、当時は留学することが大変な信望を得たようで、留学を標榜することで株を上げたかったようだ。また、上述のごとく『中西報』には「十四歳で欧州に留学した」とあって、『天津名伶小伝』の十四歳で初めて上海に出てきたというのとは明らかに異なる。このように、鐘声自らから聞いたという記事も不確かだから、その経歴の確定が難しいのである。

二 上海劇界入りと新劇初演

王鐘声が演劇界に入る契機となったのは、上海で阿片禁煙運動をしていた時に、教育家で駐日領事も務めた馬湘白（湘は相ともする）や実業界の沈敦和（字は仲礼）という篤志家と知り合ったことにある。^(註15) 馬湘白は上海で一九〇三年に学生演劇をやった徐匯公学の校長でもあったから、演劇に関心があったろう。包天笑によれば、当時上海で最も演説が上手だったのが馬湘白だというのだから、^(註16) それに見こまれた鐘声の演説は確かに人を惹きつける魅力があったと考えられる。音声言語が重要な新劇で、彼が感動を与えられたのは、このような人を奮い立たせる感染力を身につけていたからであろう。

さて、一九〇七年八月二九日（旧七月二日）、王鐘声は春陽社を結成を宣言した。^(註17) だが、王鐘声が春陽社の創設意見書を発表したのは十月一日で、^(註18) 上演はさらに後日のことであるはずだ。柏彬によれば、まず租界でなく上海中国人居住区南市の永錫堂で『アンクルトムの小屋』（中国名『黒奴籲天録』）をやったという。^(註19) だが、これは正式の公演とは思えず、参考にとどめたい。その後、英国人のアマチュア・ドラマ・クラブ（ADC）が常演していた西洋式劇場・蘭心大戲院で公演して、^(註20) 初めて大きな反響を呼んだ。この上演日時を徴し得ないが、ただ十

一月十一日の新聞に、『黒奴籲天録』は雲南の早魃被害に対する慈善公演とはいえ、これは慈善のためだけでなく中国の民衆を目覚めさせるもので大いに感激したという記事があるから、上演時期はこの頃だと確認できる。^(註21) 辛島驍は一月公演したが、借用料が高すぎるので愚園に移ったと述べるのみで、公演日程は記していない。^(註22)

ともかくも、中国本土最初の新劇公演という歴史的第一作が上演されたのである。旧劇の手法や音楽、歌を残した部分もあるが、まず「のべつ幕なし南京芝居」といわれた中国劇に幕を用いて各場を区切り、伝統演劇には本来ない背景をつけた。これは単に幕を備えただけでなく、脚本自体を幕で分け、各場に固定した舞台装置を設けたから、伝統演劇のような次々に場面が転換することがなく、場数も少なくなった。それに、また当時の上海はすでに舞台美術が用いられてはいたが、さらに進んだ照明設備などを使用したから、中国国内での新劇人が行った最初の公演として時代を劃す出来事であった。これに対して、徐半梅のような開明的な日本留学生が、「芝居自体は新作京劇と変わらず、囃子がつき登場詩吟や名乗り…、一番可笑しかったのは馬鞭をあげて（京劇で乗馬の意味——吉川）登場してきたことだ」と、五十年前を回想して、王鐘声の演劇を聊か冷笑しているのは、当を得ているとはいえない。^(註23) 日本という外国で、純粹の新劇を見慣れた観客を相手にするわけではないし、当時中国国内のどこにも新劇養成機関がなかったわけであるから、舞台に出演できる新劇人など存在しなかったのだ。この点を斟酌しなければならぬであろう。

ともあれ、上海には北京と違った好条件があった。それは、上海の一流劇場は晚清期、ほぼ地元上海の旧劇ではなく京劇を上演していた。だが、当時の上海人で北方の京劇が含有する台詞や歌の音調の快さを味わえる人は少なかった。それにもかかわらず、京劇劇場は接待・社交としていつも繁盛していたので、本場の北方役者をつねに呼んでいた。本場北京の観客と違って京劇の歌に心酔する芝居を聴く「聴戲」よりは、演技や激しい立ち回

りなどを観る「看戲」を楽しんでいたのである。これが、新劇を受けられる「観る」客側の素地であったともいえよう。

三 新劇学校、科白劇の成功と挫折

さて、上記徐半梅の回想録によると、上述の春陽社公演以前に、王鐘声は通鑑学校を設立して生徒を募集したと述べ、その経費は経済界の沈敦和が出したという（註8「通鑑学校」）。蘭心公演での出演者はどこからきたかといえば、丁羅男^(註24)は上海の素人京劇役者（票友）が主とは述べているが、主役だけで演劇はできず、当該学校学生の出演も必要だったはずである。学校では「毎日稽古」して、二か月で公演したという徐の言葉も自然に思われる。徐半梅が実際にこの学校で教えた人だからだ。なにしろ新劇というものがない当時だから、見たこともない新劇を志向する人間はいなかったろう。『黒奴籲天録』上演後の記念写真には、二十数名の出演者の内、十数名は容貌から少年とわかる。^(註25)これらの少年こそが通鑑学校の学生で、票友らを合わせたのが「春陽社」であったろうと思われる。そこで、黄颺が「春陽社はわが国内最初の新劇団だ。王鐘声が学校の質を高めるために組織したもので、社中には京劇の素人役者もいた」という言葉も、説得的である。^(註26)

この半年後の翌年春、朱双雲『新劇史』へ春秋によると、鐘声は上海に戻ってきて、東京の春柳社から帰国したばかりの任天知と通鑑学校を「合瓶」（一緒に始めた）と書いている。^(註27)今回、徐半梅は自分がこの学校の活動に参加したとは一切言っていない。徐は春陽社設立前の通鑑学校で教えたことや、文芸新劇場での鐘声との事柄（後述）は比較的雄弁に語っているから、このとき関わっていたら必ず具体的は話をしてはいるはずだ。ということとは、

徐半梅は参与していない。なぜならば、本場の東京で春柳社に所属していた任天知が指導したからであろう。鐘声は任天知と合流して、完全に日本の新劇スタイルによる通鑑学校で、票友を含む春陽社とは違っていたので春陽社の名称を掲げなかった。そこで、票友と合流して春陽社の劇団活動に参加させていた前期と、日本式新劇スタイルによる後期通鑑学校は、名称は同一だが性格が異なっていた。したがって前期通鑑学校は一九〇八年旧正月の張園での公演を最後に、翌月任天知を迎え入れることで、新たな後期の出発になったと考えられよう。

ところで、旧曆三月春仙茶園で『迦茵小伝』を公演した。任天知の影響もあつたことであろう、鐘声の新劇に聊か不満であつた徐半梅も客席で観ていて、中国で初めての新劇作品は何かと訊かれたら、この伝統演劇の手法を取り去つた『迦茵小伝』を挙げると、この公演の成果を認めた。京劇役者・熊文通が「これは芝居ではなく本当のこのようだ」といったことが真の新劇として成功した証明だといつており、さらに後に好評を得た王鐘声の女装で女性を演ずるのはこの時からだとも述べている。^{註27}これも、鐘声新劇にとって重要なことであろう。それは、以後しばしば解放された新しいタイプの女性を彼が演じ、世に見せることになるからである。

この後、『新劇史』〈春秋〉によると、通鑑学校の学生を連れて蘇州で十日ほど公演したが思わしくなく、杭州公演に赴いたがやはり十日ほどやって失敗し、また上海に戻る。しかし、適当な上演場所を捜せず、結局愚園で一週間ほど『張汶祥刺馬』(後述)などを上演したが、入りが悪くて、ついに鐘声の通鑑学校は解散してしまつたといふのである。^{註28}この間の経緯を、『天津名伶小伝』では「杭州で過労のため病に倒れた一か月の間に、学生はみな四方に失踪したので、金も底をついた」と述べている。鐘声の学生が逃げ出したことには、いくつかの理由がある。通鑑学校の学生募集に、無料で勉強でき海外留学させると謳つてある(留学は仕官への道が開けていた)のに、鐘声が演劇に向いている生徒を選んで演劇を勉強させたところ、生徒達から勉強をするために芝居を習い

に來たのではないとの抗議が出たので、「中国が富強の国になるには革命が必要だ」と鐘声が主張したから、生徒には恐れもあり、役者は高尚な職業ではないと家族に相談して退学した。残った生徒もいたが、この学校はやがて廃校になったと、こう梅蘭芳は記述している。^(註29)

当時の通念からすれば役者は被差別民であり、その上、経済的問題も深刻だった。新劇は一般になじみがなく、一つの劇は一度見れば何回も観に來ない。しかも、旧劇が使わない背景や照明、それに衣裳も個別に必要だ（旧劇は役柄などでほぼ固定していて他の劇にも使い回す）。わずか数回公演のためにその都度作らなければならぬので、収入が少ないから経営が成り立たない。学生は留學生と違い本格的な新劇を観たことがなく、その醍醐味も味わったことがないし、新劇人は生活が困難だから、将来を悲観して去って行ったのであろう。これに対して、鐘声の立場を理解すれば、旧劇役者は被差別民だが、新劇人は国家社会を指導するエリートであって、そこで留学を志すような人材を求め、文明的な教育を施そうとしたのである。この演劇活動を、鐘声は知識人の崇高な使命だと自認していた。事実、晚清民初の当時、鐘声のような新劇人は伝統演劇をやる「優伶」と一線を劃したのである。例えば、一九一一年の天津『大公報』に「營業の正當ならざる範圍」に「優伶」が入り、「優伶にあらざる改良演劇者はこの限りでない」と新劇人は別格と認識されていることがわかる。^(註30)

しかし、新旧舞台人に対する一般人の頭から、なかなか偏見はぬけなかった。一九一〇年の北京『蜀言報』に「近頃、忽然と鐘声、木鐸などという者がよく新聞に現れているが、立派な人物なのか、それとも下劣なのか、いかなものだろうか。演劇改良をやるというが、果たしてそうだろうか。実際は無聊の徒であって、金儲けの法を思い立ち新聞社に涉りをつけ主義主張の場とした。事がうまく行くと良家の子弟をかどわかして芝居を習わせ、自分の利益としている。彼らの稼業とはこんなものだ。…(王鐘声——吉川)は昨年杭州に行つて、公然と

中学卒業生を誘って戯子（役者に対する蔑称で河原乞食の意——吉川）にしようとし、教育界に阻止された。：民政部に演劇改良を奉呈したと聞く。もし認可されると、良家の子弟を入れて徒弟としても、誰もこの苦を阻止できない。以前、上海で学校を立てて生徒数十人を招いた時も芝居を習わせた。生徒は面白がってこれに従ったが、父母に知られて多くは家に連れ戻らされた」と述べているから、北京で新劇人の養成をすることには、簡単に理解が得られなかったようだ。^{（註31）} 鐘声や木鐸の女性問題については、上海の新聞に様々ゴシップ記事が書かれている。^{（註32）} ただし、『蜀言報』の編集者であった汪康年は清朝政府の提灯持ちで、演劇改良派の人間をこきおろしていたというから、中傷の常套手段である女性問題をもって非難したものとも思われる。^{（註33）}

四 天津初演の状況

朱双雲『新劇史』〈春秋〉の戊申夏五月（一九〇八年六月）の件に、「この月、王鐘声北のかた燕京に走る」とあり、多くの著述がこれを受けて、あるいは北京に行ったとか、天津に向かったと書いているが、朱双雲は南方人で北の事情に疎く、この「燕京」は北京でなく明らかに天津を指しているの^{（註34）}であり、しかもこの〇八年六月に天津に入ったとの確証などはまだ見出せないのである。

宣統元年暮の『天津名伶小伝』には、「その天津に来たのは下天仙の招聘に応じたので、二月に開演した」とあって、もし再来ならばこの伝に必ず前の初回のことと言及するはずであろうし、かつ天津『中外実報』元年春閏二月十三日の天仙茶園広告にも「洋上新到 清客串 鐘声先生」と明記されている。即ち、日本租界の下天仙（オーストリア租界の天仙茶園と区別するために「東天仙」に対して「下天仙」と呼んでいた）に、鐘声が前年すでに

来ていれば「新到」などの二字は用いないはずである。^(註35) いずれも天津の当地で書かれたものだから、鐘声の天津初公演は恐らく元年（一九〇九年）、新曆では四月で間違ひなからう。天津『大公報』には一年半前の一九〇七年十月十五日、すでに「春陽社意見書」という設立の趣意書が出され、翌日には「春陽社総章」という組織運営の規約も示されているが、本名の王熙普だったので、なじみがなかったかも知れない。

ところで、前年一九〇八年の晩秋十一月十四日に光緒帝、翌十五日に西太后と相繼いで逝去したため、所謂「国喪に服す」ということで、次年度の春まで一切の歌舞音曲が禁止されていた。^(註36) 〇九年に入っても漣仏会が中止になって、「本年国喪満たず二七か月恒例により行事を停止する」と、期間を二七か月としている。^(註36) だが、北京では外城総庁の長官王善荃が劇界の苦境に同情して、ドラ太鼓は鳴らさないという条件はつけていたが、旧曆正月の二月初めまでの百日で服喪明けとしたのである。^(註37) これは「清唱」と呼ばれ、ドラ太鼓の打楽器の部分は、口唱歌で人間が唱える上演方法である。ところが、天津では旧二月に入って、大観と元昇の両劇場がドラ太鼓を鳴らしたので、南段総局はこれらの劇場を封鎖し、園主を呼び出して、以後各園は清唱も許さぬと通達した。^(註38) 北京の方は、王善荃が二月に予告どおり「説白清唱」上演を許したが、^(註39) 天津では、翌閏二月になって劇場側の請願によって清唱を守るといふ誓約書を書かせて、ようやく再開を許した。^(註40)

こうした天津劇界の状況下で、鐘声は宣統元年旧曆閏二月十三日、つまり一九〇九年四月二日に日本租界の天仙茶園で頭本『尚義軽生』を公演し、全く馴染みのない天津の観客に、初めて新劇を披露することになった。因みに、この「頭本」というのは、連続物の最初の一段を「頭本」といい、以下「二本」「三本」……と続く（通し狂いは「全本」と呼ぶ）。『尚義軽生』というこの芝居は、普通『張汶祥刺馬』という外題で呼ばれ、張汶祥が両江総督の馬新貽を刺殺した事件をもとに作られた復讐劇であった（後述）。この芝居の広告を見ると、第一場「夕日

の戦地」、第二場「書齋の情景」、第三場「湖口県の城壁」、第四場「冷たい道の残雪」、第五場「上海黄浦灘」、第六場「妓館の一室」の各場の名称があがっていることで、明確に各幕で場を分け、舞台装置に凝ろうとしている意志が伝わってくるのである。この六場をやるのに、なんと王鐘声以外に、三六人も出演者が名を連ねている。その名前と、前後数日の芝居広告を対照してみると、出演者はほぼこの天仙茶園に所属していた旧劇の役者達であろうことがわかる。そこで、鐘声の新劇がまだ旧劇の要素を残したものであろうとも推測される。

鐘声はその後も天津に逗留していて、大観茶園を改築し「新舞台」を建設した。彼は日本の劇場建築を学んで建設した上海「新舞台」に匹敵するものを北方の海港都市天津に建てることにし、七月に竣工した。そして、旧劇場とは違う、以下九項目の改良点を示した。^(註4)①回り舞台を設置。②美術の上手による臨場感溢れる背景。③名優を招聘して新旧両演劇を上演。④学士文人に文明的な新劇を書かせ人々を感化。⑤一切の風俗を害する淫猥な演劇の禁演。⑥他の劇場にない電気照明の駆使。⑦衛生や接待の極力改善。⑧全ての石油ランプを取り除き電灯使用。⑨夏は電気扇風機を、冬はストーブの設置。かくて、開業したのは、九月二五日であった。^(註5)

王鐘声は十月二日(旧八月十九日)から二四日までの約三週間余り、この最新劇場「大観新舞台」で公演をした。その時の演目は、全本『縁外縁』を皮切りに、全本『孽海花』、『沈香床』、『林文忠』、『恨海』、『黒籍冤魂』、『電術奇談』、『双淚碑』、『混世鐘』、『愛国血』などで、次々に上演した。共演者は蓬萊居士、小孟七、紀寿臣、万鉄柱、桴海客、牡丹花、劉吉慶、それに注目すべきは、頭本一三本『恨海』、『電術奇談』と『双淚碑』において、当時の天津を代表する女優・金月梅らとも共演していることだろう。当時、他の地域では男女共演を禁じていたから、男女共演という当時としては新劇でも実に珍しい上演となった。演技派で河北椰子(後述)の名女優であった彼女は、鐘声と共演する過程で多くの新しいことを学び、後の女優劇で参考にしたはずである。その「新

排文明新戯」(この「排」は本来リハーサルがされたの意だが、ここでは「新作」ということ)と銘打った『愛國血』では、十六名もの出演者の名を記している。王鐘声の演劇は午後七時からの夜劇で、その電灯照明はこれも客を呼ぶ大きな宣伝材料であつた。^(註43)

王鐘声はこのように天津では、大観茶園新舞台建設と演劇活動に精力を注ぎこみ、『天津名伶小伝』によれば「背景がこの上なく素晴らしい。わが国で従前ないものだったので毎日観客が目白押し」なのが、この新舞台は「惜しいかな、始めて一か月で内紛が生じ、数か月で閉館になった」と記す。十一月七日の『順天時報』にも「本月十九日(新曆十一月一日)、忽然停演」とあつて、十月公演の終了後程なく、閉鎖としたのである。^(註44) その理由を、出資者の非のように『天津名伶小伝』には書いているが、その内情について、北京『正宗愛國報』には、天津の大紡績商・宋沢九などの出資で新舞台を設立したが、出費がかさんで日々負債を重ね、かつ脇役が新米役者で客足も遠のき、ついに出資者とも折り合いが悪くなって、裁判沙汰となつたと内情を告げている。しかも、最後に「この大事業(王鐘声の新劇)をしようと思えば、金を湯水のごとく使える大人物でなければならぬ」と結んで皮肉っているのである。^(註45) 数日後に鐘声自身の反論が出ているが、^(註46) 是が非でも上海の新舞台のような素晴らしい劇場を北方に作りたいという彼の情熱だけでは、上海のような成功はできなかったようである。役者の未熟と、天津がまだ伝統演劇に沈酔していて、新劇に常時通ってくるような基盤が調っていなかったからだろう。ともあれ、不如意な形で天津を後にした鐘声は、宣統元年十二月、すなわち新曆一九一〇年一月にいよいよ京劇の牙城北京に入った。

五 最初の北京公演

五・一 公演の情況

王鐘声入京の前触れは、前年夏の『順天時報』に現われていた。北京ではまだ珍しかった夜劇をやっていた広徳楼の紹介に、「主要な芝居をするときには赤い電灯がつき、天井には鐘声画景の四文字を書いた横断幕が垂れその内側にも赤い電灯があった」というように、背景と電気照明で観客の目を惹きつけるのに「鐘声画景」と標榜していたのである。^(註47)つまり、当時の北京はまだ鐘声を知らなかったが、彼が大観新舞台で舞台美術の素晴らしさを売り物にしていたから(実際は彼自身がすべて描いてはいない)、劇場側は鐘声の名を借りて宣伝したわけであろう。また、前年の暮、新聞紙上には、上海の張園で上演した新作『警世時劇』が舞台美術にも力を入れ、娼妓たちが出演して大変な盛り上がりを見せたことを知らせた。そして上海は新作が多いのに北京は少ないからいつまでも発展しないのだと、新劇を渴望していたのである。^(註48)こうした気運の北京に彼を招いたのは、早くから上海公演をして新文明にふれていた田際雲であった。彼は京劇ではなく、河北梆子(当時の北京では「秦腔」と呼んだ)という地方劇の女方で、晚清民初の北京劇界で最も熱心に改革を推進した人物であった。玉成班劇団を主宰していて、自ら天楽園という劇場をもっていたので、鐘声はそこで公演することになったのである。

さて、こうした前触れがあつてから、一九一〇年一月、文字通り「鐘声新劇」の北京初演の幕が切つて下ろされた。初演の日については、すでに考証したように^(註49)、一月二三日(旧宣統元年十二月十三日)頭本『縁中縁』を皮切りに、翌日が同劇の二本、二五日頭・二本『擘海花』、二六日『愛国血』、二七日『二本縁中縁』、二八・二

九日頭・二本『宦海潮』、そして最後の三十日が『愛国血』と、当初予定の二倍の八日間公演を行った。^(註50)これが、天子のお膝元で、北京の民衆が観た初めての新劇公演であった。当時、北京ではまだ珍しかった夜劇の照明の中、「鐘声が演ずる各新劇は歌ではなく台詞を重んじる。脚本は各種の最近出版された小説で、随時諷悟をまじえる。：まず舞台には幕が掛けてあってこれが開かれると、鐘声新劇の大きな四文字が現れる」と、京劇などの旧劇がまずお囃子で客の耳を惹きつけるのと違い、いきなり目に訴えてきた。

『順天時報』は鐘声の到来を歓迎して、「鐘声は米國に留學し美術を研究し、いまや天樂園で新劇を公演する。収益の加算金は美術学校の経費に充てる。演劇は真に逼り、かつ愛國の脚本は社会の利益を十分に増すことができる^(註51)」とか、「鐘声はかつて欧州を遊學し演劇を深く研究した。また二十世紀の文明各国では俳優を非常に重視している。ましてわが中國は社会が腐敗して改訂新劇で感化改革しなければ、一日千里の速度は望めないのだ。そこで、大いなる願いをこめてわざわざ北京に来てくれた。すべては現身說法（釈迦が現世に様々な姿で現れ法を説いて庶民を濟度したように、新劇人が演劇で諸人物に扮し教化することを譬えた——吉川）で、到るところで國民を覺醒しあらゆる祖国の弊害を打破する」と称賛し、大変な期待の寄せようであった。そして、天樂園におしよせた観客は、鐘声の芝居は夜十時過ぎなのに、六時には早くも先を争って入場し、四時間も待っていると聞いた熱狂ぶりであった。だから、二千ほどの座席になん百という補助の腰掛を出したが足らず立見もでた。それでも味わいは尽きぬといった様子なのだから、鐘声の名声がわかろうというものだ、と述べている。^(註52)

五・二 公演の二演目とその内容

『順天時報』には鐘声の公演演目の梗概や台詞をのせて参考としている。観客は新劇の筋を知らなかったから

である。『中西報』によると、漢口では説明書を販売していたという。^(註53) 北京で市販していたかは未詳だが、^(註54) 数劇は紙上に連載し台詞をまじえて紹介しているのである。当時の新劇は多く口立て（幕表制）で、定本があるわけでもなく、また同名の芝居でも、人により時により変化する。かつ、時が過ぎれば忘れられ、遺失してしまう。ここに紹介するのは、この年、鐘声が実際に上演した芝居に基づいて記者が全劇でなく興味のあるところだけを記したものにすぎないが、他の同名の内容とも比較でき、それなりに意義があるので以下略記した。

『擘海花』（妓女・賽金花の話だがかなり脚色されている）は、まず金大人（即ち洪鈞）が普段着で登場。友人たちと庭園にゆく。舞台には電光の中に描かれた庭園の風景が浮かびあがる。友人たちと酒をくみかわし、妓女をよぶと、鐘声扮する傅彩雲（即ち賽金花）が細袖の軽装で登場。頭は西洋風の髷。金大人は「どこかであったことがあるような」というと、彩雲も同様に応ずる。彩雲のうなじに赤い痕がついているので尋ねると、「前世で首吊りをしたからだといわれた」と答える。金大人は驚いた。以前こういうことがあったからだ。都へ科挙の受験に行く途中、煙台で桂玉という妓女となじみになった。この妓女は頗る人を見る目があり、金大人に旅費として全財産の三百両をやった。そして科挙終了後、桂玉を娶る約束をし、桂玉も信じて客をとらず待っていた。ところが、首席で合格した後、金大人は桂玉に背き全く音沙汰がないので、都に上って金大人を訪ねた。すると、借金加倍の六百両を返しただけで、約束事には一言もふれなかった。桂玉は「お金を貰いに来たのではない」と泣きながら旅館に帰り首を吊って自害してしまった。十七年前のことであった。彩雲の前世こそが、この桂玉であったのだ。その後、金大人はロシア・ドイツの勅使となり、彩雲を正妻として洋行することを約束する。正妻の金夫人が自分は西洋人が怖いし言葉もわからないから、彩雲に行かせればよいという。そこで、中国式の結婚式で彩雲は伝統衣裳を着て輿に乗り、爆竹をならして輿入れし夫人と姉妹だといいい、ついには正夫人におさまる。

すっかり全身白で洋装した彩雲は、派手な帽子をかぶり細袖に長いスカート。西洋庭園の中で、御者と彩雲が他愛もないことを話し、御者が席を外している間に、外国人がやって来て彩雲に声をかけ、中国語が少しできるといった言葉をやりととりすると、彩雲は「欧州人は男女みな自由結婚だそうだから、私達も自由結婚しましょう」等というところに御者が戻ってきて、その西洋人を追い払う。御者と対座しているところを、参事官が見つけ彩雲に「勅使夫人なのだから以前の妓女のような恥知らずなことはなさらぬよう」とたしなめる。彩雲が反論したので、参事官は金大人にいつける。金大人が彩雲をなじると、参事官が自分に手をだそうとして拒絶された腹いせに言ったのだと反論したので、金大人の怒りはおさまりに逆^{さか}に慰めた。その後、彩雲は参事官の部屋に行き甘い声をかける。

また、彩雲と御者が談笑しているのを、金大人が見かけ腹を立てて椅子を投げつけようとするので、参事官がなだめにはいる。そこで、彩雲が「私は正夫人だから夫婦は平等だ。ともに自由があり、男性は女遊びをしているんだから女性が家で男と逢ってなにが悪いか」といい返す。さらに妾などは愛玩物と同じで、好かれているときは「宝物」などといっているが、嫌われたら、人にくれてやるのだからとまくしたてる。金大人がまた椅子を投げようとしたので、参事官が再びなだめてつれて行く。彩雲は「これも多妻の害。私こそは下賤の極みだ」と自嘲し大声で笑って「こうやって主人の面子を潰しておかなければ、妾をめとるものもつとふえるだろう」といったところで、楽屋からラッパの音がしてこの劇は終了である。こうした劇中の警句がいわば画竜点睛で、鐘声の演劇の特色であると結ぶ^{註35}。この梗概はじつは中間部がぬけている。つまり、外国の商人がロシア国境の地図をもってきたときに、彩雲が機転をきかせてこれを購入したおかげで金大人が成功した部分である（後述）。

もう一つの劇が『愛国血』で、鐘声は軍服に剣を提げた若い将校に扮している。紀寿臣扮するところの老将の

息子という設定である。第一幕。敵のスパイがカメラを手に持って老将に話をする。第二幕。若い将校が中国の女性になぜ洋服を着ているかと尋ねると、中国は弱いので馬鹿にされるから洋装をしているのだと答える。さらに留学して国のためになるのだという、将校は若い女性なのに偉いと誉め、自分も愛国心をもっているし、外国では自由結婚なのだから、よかったら夫婦にならないかといって、お互いに手を取り合って退場。三幕。将校がこの娘と結婚しようとして父の許しを得ようとするが、前線での結婚はご法度だということで、将校は軍服を脱いで娘と出て行く。第四幕。大海に波濤、それに月光が照らしている中、若い二人は芸を売って生活しようというヴァイオリンを弾き笛を吹く。それに将校は剣をぬいて旋回して踊る。

第五幕。敵のスパイが宝石をたくさん持ってきて老将の夫人に献上する。そして「老将が降伏したら皇帝が大元帥にしてやる」と降参を勧める。それを兵卒が聞きつける。第六幕。兵卒がそれを息子の将校に知らせる。息子は信じないが、自分の剣を娘に託して父の所に行く。第七幕。息子が父に詰問するが、「そんなことはない。あつたとしてもお前には関係ない。早く行かないと首をはねるぞ」というので、父の胸倉を掴み「父上、国を忘れ敵に降伏したら、大義のために父上の命をとる」といい、この場で「大義滅親」を唱えるいくつかの警句を連ねる。父ともみあいになり、父は刺されると恐れピストルを発射するが命中せず、最後は息子が七首で刺殺する。それを知った母は息子を裁判にかける。第八幕。裁判で母は息子を父殺しで投降者だと罵るが、息子は父殺しは認めただが、投降は認めなかった。裁判官はなぜ父を殺したかと原因を聞いたが、息子はただ処刑してくれるように望むだけだった。終幕では、例の兵卒がいきなり七首を持って飛び出し大声で夫人を罵る。「貴女自身がしたことではないか。息子に濡れ衣を着せるのか」といって夫人を一気に刺し殺し、自分も自害した。息子も夫人も一言もいわなかった。兵卒は国や家の恥をさらさなかったのである。無言の中に流れた血はみな愛国の誠から出たもの

だから、『愛国血』といふのであると結んでいる。^(註56)

なお、鐘声は二六日の最初の公演では娘役をやり、三十日では若い将校をやったが、娘役も本当に女性らしくかつたと誉めている。因みに、当時上海でも男女共演は許されなかつたし、まして北京では女優の出演が禁じられていたから、天津での金月梅との共演はそうした意味でも特筆すべき事であつた。鐘声はいわば仕方なく女性を演じていたのであるが、徐々に意志の強い女性を好演し慮外の好評を博した。^(註57)

漢口『中西報』によって補足すると、この話は日露戦争時の話で、日本人の老将がロシア女性と結婚し、それに騙されて遼陽の地を譲る約束をする。息子の若い将校は英傑で継母の所業を恥ずべきとした。一人の蒙古娘を救つて軍営に入れたことで追い出され、娘と東三省で芸を売っていると、一人の衛兵がきて父が敵国と通じていると知らせる。驚いて娘と別れ帰ってみると、まさに投降の密約の日で、ロシア軍が攻めてきているのに、父は兵を発しない。息子は極力せかせるが、父は怒つて息子に刃を向けたので、息子が逆に父を殺して、遼陽を守ることができた。しかし、裁判で父親殺しのため父の銅像の下に繋がれ、刑の執行を待っている。夜が更けて誰もいない中、息子は父の像に向かつて泣いて訴える。その言葉は甚だ悲痛哀切である。翌日の執行に際し、蒙古娘が出てきて若いこの将校を刺殺し自刃する。例の衛兵が登場してロシア人夫人を殺し、これも自害する。^(註58)これで、老将の悪事は世間に知られなくなつたと梗概を知らせているのである。

五・三 観劇の反応

当時、北京の芝居小屋が並んでいた外城の警察当局最高責任者は、「外総庁庁丞」と呼ばれていた。民政部の下にあつた機関で、当時の庁丞・王仲郷は天楽園に足を運んで「鐘声編演之新劇」が社会に有益かどうかを観に行つ

た。その日は『宦海潮』で、王庁丞は観劇後、この作品は官界の陋習を暴いたもので、勸善懲悪の意味が寓されていると頗る称賛したとある。^(註59) また、北京『正宗愛国報』に樂三の署名で述べたこの初演の劇評によると、「新劇についていえば。科白を重んじ、まるで動く絵のようである。各人の演技、扮装が堂に入っていないなければならないから、；旧劇より難しい。旧劇は利口な子供が育成所で稽古しさえれば、教養や知識がなくなつて名優になる。新劇は第一に人格が高尚で卑しい気風をもたず物事を深く極めてこそ自然にできるので、その演技は型にはまらないのだ」という感想を表わし、旧劇と一線を劃している。^(註60)

『擘海花』における鐘声の演技を、「どこも堂に入ったものでそっくりだ。妓女に扮すれば本当に上海流行のそのままだし、洋装ならアメリカ流行の髷とそのようにも変われる」と述べ、台詞についても「どの言葉もハッキリと明瞭で味わいがあり、これまでの舞台では経験したことがない。詩句をしつかりと念じるので、一句ごとに必ず拍手がわき起こる」と称賛している。鐘声が登場するときには音楽が流れたといい、鐘声はもと画家だから山水人物なども上手で、舞台の書割はみな鐘声自らの手で描いたものだとしている。^(註61) 米田祐太郎によれば、「壮士芝居の始めは、令嬢に扮して居る役者が急に舞台で袖を捲り、芝居半ばに滔々と政談演説などをやり出し、それがまた呼物の一つになり、一時は客を呼んださうだが、支那でもこれに似たことは幾らもある」というような芸風が鐘声にはあつたはずで、前述の「警句」をしばしば発するのがそれに当たろう。彼が上海で阿片禁煙運動の演説をし、人々の心を掴んだのも、彼の生来の才能であつたと思われる。当時、演説と演劇は識字率の低い中国にあつては、重要な民衆教育の利器であり、それは有識者も深く承知していたのである。^(註62)

六 二度目の天津・北京公演

六・一 公演の情況と演目

北京初演は、一応の成功をおさめ、また天津に戻った。この時、田際雲の玉成班から紀寿臣、万鉄柱、羊喜寿ら三人をつれていった。そして、元宵節（旧暦一月十五日、新暦二月二四日）以前は「忌辰（皇室の命日）^(註61) 齋戒（諸神の祭祀）」という宮中神事の音曲禁止日が多いから、それ以後、北京に再登場するだろうと報道されている。そして、三月初めに天津オーストリア租界の同楽新舞台で劉木鐸らと共演した。共演者は、紀寿臣、徐寿山、金桂蓮、小桂芬と、木鐸、光華たちであった。^(註63) 鐘声は『秋瑾』、『寒桃記』、『黒奴籲天録』、『福爾摩斯（シャーロック・ホームズ）大偵探案』、『国会熱潮』、『籌還國債』^(註64)、また頭・二・三本『張汶祥刺馬』と『独占花魁』、それにナポレオンを題材にした『百合花』^(註65)を上演していたが、木鐸らと分かれて日本租界の天仙劇場に移って間もなく、鐘声はまた北京に戻ってきた。

二度目の北京公演は、まず三月十四日『寒桃記』、十五日『黒奴籲天録』、十六日『禽海石』^(註66)の三日間で、その後は休演した。それは、「齋戒忌辰」にあたったからである。今回は初演の時とちがって、陣容を整え天津で共演していた劉木鐸、光華、蓬萊居士なども一緒にやってきた。^(註67) 当時玉成班に所属していた梅蘭芳は鐘声の北京公演について、同行者は劉木鐸、亜方、諫民、光華らと少数であったから、李玉桂、紀寿臣、万鉄柱、鮑吉祥、周三元、羊喜寿ら玉成班の団員が助演したと述べているが（註12：二〇二頁）、これは前後数回の公演を混同しているの、初演では木鐸や光華、蓬萊居士などは同行していなかった。

さて、鐘声は忌辰斎戒の日に保定まで足を伸ばして、三月二十日『張汶祥刺馬』（別名『杖義軽生』）とか『尚義軽生など』を上演した。^(註68)この劇は天子のお膝元では禁止される可能性があると思っただからであろう。南方ではよく知られた実話劇であった。そして、『清朝野史大観』巻四に引く「時に上海の劇場では『刺馬伝』全本（即ち『張汶祥刺馬』の通し——吉川）をやっているので安徽の巡撫が上海の道官に禁令を出すように請うている」ということは、こうした為政者を殺す首謀者を賛美するような芝居は好ましくないと判断したからに違いない。

王鐘声は敢えてこのいわくつきの『張汶祥刺馬』を北京で三月二十六日に上演した。ただし、張汶祥が馬新貽を刺殺したショックな事件は、南北に知れわたっていたからであろう、『杖義軽生』という抽象的な別名を掲げていた。また二八日には、木鐸と全本『宦海潮』をやり、その後、初めて内城の吉祥園で四月二日～四日までの三日間、昼夜公演をした。この時、『正宗愛国報』に出た広告に「ハッキリと『説白新戯』の四字が浮かび上がって、歌を聴くのが芝居と知っている北京の客に、仕草と台詞の科白新戯をまたしてもアピールしたのである。

じつは、三月二日に国恥記念第二回準備会で、鐘声は（劉木鐸も参加）この会の経費を捻出するために夜劇を上演するのはいいが、天楽園とは一か月の契約があるからと、内城にあった東安市場の丹桂戲園出演を求めている。内城は本来劇場建設の禁止されていたところで、夜劇は慈善公演のみ許されると決まっていた。鐘声の公演は電気照明が売りであることもあり、ほとんど夜劇で、その方が仕事帰りの客も来て、入りも良く収益が上った。だから、鐘声が北京に来た時には、なにかと慈善の理由をつけ「慈善夜劇（義務夜戯）」として上演していたのである。同じ、内城の吉祥園の演劇が国恥記念会のためのものかとも思われるが、四月五日には旧暦の三月七日に上演すると、一週間以上の後のことになっているから、吉祥園の上演は国恥記念会とは別にやったものであろう。^(註69)

この三月～四月にかけての北京公演の演目は、三月十四日『寒桃記』、十五日『黒奴籲天録』、十六日『禽海石』（以上は天楽園）、二十日『仗義軽生』（これは北京でなく保定公演）、二八日夜全本『宦海潮』（天楽園）、四月二日昼『宦海潮』夜『縁中縁』、三日昼『愛国血』夜『禽海石』、四日頭二本『孽海花』、五日昼全本『孽海花』（以上は内城の吉祥園）、六日『茶花女』、七日『恨海』、九日『熱涙』、十日『奪嫡奇冤』、十二日昼『寒桃記』夜『留学生来官』、十三日昼『杜十娘怒沈百箱』^{註70}夜『夢遊』（以上は天楽園）である。この間における主な共演者は、新劇の木鐸、光華、蓬萊居士の三人と旧劇の紀寿臣、万鉄柱が広告に載る役者名だが、『正宗愛国報』ではいつでも鐘声一人が真ん中に大きい活字で出されている。

六・二 二度目公演の演目とその内容

『順天時報』は一九一〇年四月一日から『張汶祥刺馬』（『尚義軽生』）の紹介を始めた。馬制台（即ち馬新貽）が高級武官の正装で登場し、尚大人（即ち曹二虎）と張汶祥の二将、馬制台と尚大人の夫人が続いて登場。宴会の席で馬制台と尚夫人が互いに目配せをして情を通わせているのに、尚大人が気づき激怒して盃を投げたので、張汶祥がなだめて退場。部下が馬制台に進言して、尚大人を土匪掃討の任務に派遣すれば、出陣に家族同伴はできないからと入れ知恵、馬制台大いに喜ぶ。派遣書簡を尚夫人に渡し、夫人が家に帰ると尚大人はまだ腹を立てていて椅子を投げる。夫人は逃げながら、尚大人に最近お役目が回ってこないから自分が取り入ってあげたのだと、派遣書簡を見せると、尚大人も納得して喜ぶ。

馬制台は儀杖兵が居並ぶ中、尚大人に凱旋したら爵位を増、出世させると約束する。尚大人が喜んで帰宅すると、張汶祥がその理由を聞いて、それは信じられない、これは福でなく禍だ。同じ取り入るなら、いっそ妻を

差し出せばよい。元々妓女なのだからと知っているのを夫人に聞かれる。夫人はどこの世界に自分の妻を人に差し出す人がいるものかといひ、尚大人も張汶祥に、それならお前の妻を上げればいいと罵り、張汶祥も怒り嘆きながら退場。

尚大人が討伐から帰ってくると、馬制台はお前を派遣したのは討伐のためで、良家の婦女を攫うことではない。こんなにくさくさんの上申書が届いていると罵られる。尚大人は身に覚えのないことで、馬制台に義兄弟なのだからどうかとりなして欲しいと懇願するが、事ここに至ってはどうしようもないとすげなく断られる。仕方なく、尚大人は壁に掛けてあった剣で自害する。張汶祥は尚大人のその光景を見て、奥に入って馬制台を殺そうとするが護衛が大勢いるといわれ、機会を待つと引下がる。

四人の武官試験を受けるものが登場して宿を借りようとする。宿にいた張汶祥は、泊まる所がないなら自分の所が広いからと入れてやる。言葉を交わしている間に、翌日武官の試験があり、馬制台も必ず臨席すると知り、敵を討つ決心をする。当日、馬制台が中に座り、外では武官受験の学生が弓を引いたりしている。試験が終わり、学生もお供も下がって、馬制台が普段着で一人庭を散歩している。そこへ、張汶祥が匕首を握って襲いかかり、胸倉を掴んで馬制台が力を緩めた瞬間に刺し殺した。護衛のものが登場すると、張汶祥は「我々三人共に生き共に死ぬと誓った仲だ。今すでに二人が死んだのだから、自分も死んで誓いを果たすのだ」と大笑いして退場する。(註九)

これは史実に基づいた芝居である。事件は一八七〇年八月二日に起こった。この日、張汶祥が両江総督の馬新貽を刺殺し、全国を震撼させた。汶祥は太平天国の時、捻軍に参加して新貽を捕まえたが逃がしてやった。その後、新貽は汶祥を投降させて優遇し、自分も汶祥と曹二虎らの協力で出世したが、曹二虎の妻が美人だったのでこれを奪い取ろうとし、二虎が敵に通じていると誣告して殺してしまった。義憤を抑えられず、張汶祥は馬新

賂を刺殺した。殺害後、悪びれず少しも憚ることなかったが、残酷な処刑を受けたというのである。また、曹の妻のことは全くふれず、ただ自分の利益のため張汶祥の出世を邪魔し、その上、面会をすべて拒絶したので、怒りがたまっていた。江南郷試のため奥にのってきた新賂を待ち伏せて直訴しに近づき、三年磨き上げたブーツの中の匕首で刺殺したという紹介もあって、張汶祥の話はだいぶ異同があるようである。註七

次に、これも鐘声の十八番『縁外縁』（『椿姫』をヒントに全く当時の中国風に変えた話）。紀寿臣扮する富豪陳仁美と、光華扮する息子の陳錦文が登場。錦文は用事で金貨を兌換に行く途中強盗に遭い、強盗団に拉致されるが、下僕の助けで帰宅する。鐘声は妓女・真真に扮し洋装で登場。陳錦文が遊びに来て真真となじみになると、真真は自分をもと良家の女だったがかどわかされて妓女になったこと、心の通じ合う人がいないので、まだ身請けしてもらってないことなどを話す。陳錦文は真真をみそめて将来夫婦になろうと約束する。木鐸の扮する陸軍大元帥が高級武官の正装で登場。陳錦文が軍規を破って真真と婚約したので免職となり、その報が家に届く。父陳仁美は驚いて真真を訪ねに行き、本当に息子を愛しているなら別れてくれと頼む。父は息子が海外で五年苦学し、やっと元帥のお目に留まって参謀になったのだから、ここで立身出世を諦めるわけにはいかないと述べる。

真真もやむなく陳錦文と別れることを承諾する。陳錦文が父の所にきて真真が本当に別れるなどとはいつていないと納得せず自分で確かめようと真真に会いに行くが、真真は妓院に戻ってしまっていた。

妓院の真真はある日、一人の武官がおいていった秘密の文書を手に入れた（その内容は舞台上に白い布を垂らしそれに大書して観客に示す）。それを持って陳錦文を訪ねにいったが、まだ怒りがおさまらない様子で謝絶された。しかし秘密文書だから直接会って渡したいという陳錦文はそれを受けとり、見て大いに喜び感謝した。それを持参して元帥に面会したところ、この功績によって免職が許される。そこで、帰宅して父に一部始終を告げ

ると、これは真真の功績で、元帥も今度は妓女を妻にするなどはいわなはずだと、結婚の輿を用意させた。

そこに、偶然にも洋行から帰ってきた真真の弟も加わった。輿に乗った真真は陳錦文の家に着くと、元帥も参列して結婚式をやり正式に夫婦となり、弟も交えて大団円。途中、絶縁したが、また秘密文書のお蔭でまた夫婦の縁がつながったので、『縁外縁』と鐘声が名づけたとい(註73)う。

この他、『留学生求官』は留学生が役人になって金儲けをするそのあからさまな様子を描いたものである。このように、新劇が毎日演目を換えてやり、当時の社会の実情を映し出すので、天楽園に行ったことがある人は、頭の中に「新劇魂」が生じて、日がたつと風俗の改良に必ずよい効果が表れるはずだとい(註74)っている。

六・三 漢口公演と上海の文芸新劇場

北京での公演がおわって、劉木鐸は一か月後にはまた天楽園に戻るということで瀋陽公演に向かった。但し北京『帝国日報』によると、鐘声が上海から同行させていた女性と木鐸が懇ろになり瀋陽に連れて行ったので、以後木鐸と不仲になったという。事実、これ以後、木鐸と鐘声の共演はなくなったようである。また、もう一人の共演者・亜方とも新聞紙上に罵りあって分かれてしまったとい(註75)う。ともあれ、鐘声の計画ではまず当時、上海、天津、北京と並ぶ演劇都市・漢口に行き、その後、六月五日には第一回南洋勸業会（南洋華僑と江南の商品博覧会）が開かれる南京を目指すことにな(註76)った。

五月十六日、漢口『中西報』『漢大舞台』に、「東西留学」そして「鐘声」と大書された二字の広告が出て、彼の到来を告げている。(註77)以下、当該紙上によると、この日から、『警情記』、『剣底鴛鴦』、『沈香牀』、頭・二本『張汶祥刺馬』、三・四本『張汶祥刺馬』、『擘海花』、『愛國血』、(昼)『擘海花』(夜)『徐錫麟』、『秋瑾』、『双淚碑』、

『縁外縁』と連日上演した。最後の二六日から少し休演して、六月一日からまた「時事文明新戯」と銘打った『三代代表』、二本『三代代表』、『熱涙』、そして一日休んで五日に『孽海花』をやってから、すぐ南京に向かったと思われる。というのは、鐘声は漢口から揚子江を下り、本来の予定通り、五日から南京に向かう予定だったからである。鐘声がぬけた後、この漢口では、天津、北京で共演した英国留学という徐光華が、満春茶園で『張汶祥刺馬』や『醒世宝鏡』、『重義捨身』、『禁煙強国』など、鐘声と同様の新劇を上演した。そればかりではなく、鐘声の公演終了後、同じ劇場で小孟七、曹玉堂、大大奎官のような旧劇役者も、上海劇界の影響か、『新茶花』、『黒籍冤魂』や『潘烈士投海』などの新劇家が常演していた演目をやったのである。このことは、漢口の劇界は新劇に積極的であると同時に、その新劇はかなり旧劇色の濃い演劇であったことも知りうる。

一九一〇年五月二一日漢口『中西報』紙上に石庵の「大舞台觀劇記」が掲載されており、五月十二日の新聞で鐘声の大舞台での公演を知ったという。さらに、鐘声を「近日劇界の偉人、欧州に留学した」と持ちあげ、『縁外縁』と『愛国血』の梗概をのせる。共演者として光華、蓬萊居士、癩癩、惜秋、寿臣、李錦榮の名があがっている。この寿臣は紀寿臣で、木鐸と分かれた光華、蓬萊居士などと、北京から同行していたことがわかる。

この時の石庵の寸評では、以下のようにいう。『縁外縁』と『愛国血』の二劇で王鐘声が一番良い。光華が次でその次が蓬萊居士だ。歌は素晴らしいが仕草が堂に入っていない。次が羊喜寿、癩々、惜秋、寿臣。扮装や演技は良いが台詞回しが円滑でない。演劇広告に出た他の助演者は、曹玉堂、李泰利、孟鴻群、陳月泉、そして上記の李錦榮なども、各々旧劇に出演しているので、漢舞台の伝統演劇役者であろう。鐘声の漢口での新劇はこのように歌も随時入っていたのである。

さて、この夏、南京から上海に戻った鐘声は、東京留学中であつた春柳社の陸鏡若と、南京で両江師範学校の

教師をしていた徐半梅が、ともに夏休みで上海に帰っている時に、協力して「文芸新劇場」を結成した。徐の回想は以下のように述べている。陸鏡若がすでに好評を得た脚本を東京から持ち帰ったので、鐘声が張園の舞台を三週間の契約で借りた。鐘声の団員は以前とは全く違っていたが、また京劇役者を二人つれてきた(『申報』の広告と演目の説明書からみて、北京玉成班の万鉄柱と羊喜寿であろう)。上海の京劇役者の熊文通も「一鳴」の名で出演した。最初の出し物は英国翻訳劇『奴隸』であった。これは川上音二郎がやった日本名『ボンドマン』で、『愛海波』と改名して上演した。この劇の衣裳や背景装置にわずしかない資金を使い果たしたが、客も多くなかったので、三日で打ち切った。^(註78)そして鏡若の第二作は『猛回頭』(佐藤紅緑『潮』の翻訳劇)で、鏡若の要請で徐半梅も初舞台を踏み、これは『迦茵小伝』よりもさらに素晴らしかったし、力が入った。観客の評判もよく、丸々三週間と記録破りで、営業上の損失もなかったという。さらに、鐘声は鏡若との共演によって、一層成長したと思われる(註8；三四頁)。徐半梅は以上のようにこの公演を述懐している。

この張園での公演は、上海『時報』と『申報』に同様の広告が出されている。それによると、共演者は陸鏡若、露紗(鏡若の弟)、客串管(客串は客演の意)蓬萊居士、一鳴、癩癩、惜秋、徐半梅、羊喜寿、万鉄柱、崗樵子、これに三十余名の学生とある。上演演目は、六日(夜)『愛海波』、七日(昼)二本『愛海波』、八日(夜)三・四本『愛海波』、九日(夜)頭本『猛回頭』、十日(夜)全本『鬚情記』、十一日(夜)全本『秋瑾』、十二日(夜)『禽海石』、十三日(夜)『愛国血』と『滑稽魂』、十四日(夜)『猛回頭』と『大英大神術大比尼』、十五日(夜)『徐錫麟』と『滑稽戲中戲』、十六日(夜)『擘海花』と客串管と蓬萊居士の清唱、十七日(夜)『尚義齋生』と客串管と蓬萊居士の清唱、十八日(夜)『沈香床』『大將軍』『奪人之妻 人亦奪其妻』^(註79)。

最後十八日の新聞演劇広告を信ずるならば、徐半梅の「丸々三週間」と『猛回頭』が徐の「処女」出演という回

想は正しくない。まず、「張園の場所は辺鄙で観客には甚だ不便なので、この夜公演後、暫時停演……」とあって、広告もこれで打ち切られている。即ち、前後十三日間の公演であつて、なかに「中外日報」十二周年の記念行事で、十三日昼に「新劇四幕」上演したが、これは正式の公演でもなく、十三日間を越える日程ではない。^{註80}また、『愛海波』の出演者に徐の名前があり、万物博士の記載（後述）でも、端役ではあるが出演している。あるいは、端役だから無視したかもしれない。

この文芸新劇場に関しては、上海『時報』に聊か記事がある。^{註81}それによると、（一）組織。日本の文芸協会に類するものだといひ、みな新劇を志す士であるとしている。娯楽を目的とし心を合わせてこの拳にでた。故に他種の演劇とは違つて、真にわが国初めての「模範新劇」であると標榜している。（二）順序。旧七月二日（八月六日）から開幕して毎劇を少なくとも三日連続してやる。（三）脚本。最初が『奴隸』で、いまは『愛海波』と改名した（『愛海波』に再改名）。英国劇である。第二作は『潮』で『懺悔』と改名した。日本の佐藤紅緑の作である。第三作は同じく紅緑の『廢馬』、第四作は未定だが『不如帰』をやるつもりだ。（四）舞台装置。上海のものなどは違ひ外国の劇場並みのもので、山水、家屋など本物と見まごうものである。さらに、実際に開幕した後、第一夜は『愛海波』（原名『異母兄弟』）^{註82}が上演されたといひ、その後、『時報』へ文芸〆七日〆十七日まで「模範新劇猛回頭の内容」が掲載され、それに各幕の名称と舞台装置、人物表が与えられて各場の梗概がつけられている。『猛回頭』は『潮』のことで、当初『懺悔』と改名したといつてゐるが、結局『猛回頭』となり、それが二作目として上演された。その装置は、一幕が山村の質屋。二幕は山麓の滝とくねくねした山道。三幕は家の中。四幕が月下の荒れ野原。最終の五幕は山寺の雪景色。こうした背景は、文芸新劇場の得意とするところであつたらうし、それは鐘声の舞台美術にも直結してゐたであらう。鐘声は金雪英に扮したのだが、その終幕の演技は非常に迫力

があつたと称賛されている。

この時、在上海の万物博士は「支那の新演劇」と題して、王鐘声のことを「当支那内地に、三四年前より支那旧劇以外新派なるものを生じ、其の首領は南清の王某（即鐘声）とて、曾て日本に在学中、演劇改良を思立ち、それより日本劇の演法を習ひ、背景、其道具、小道具を用ひ、又は一種の鬘を用ひ、鳴物は洋楽、脚本は新作物にて諸所を巡演し、此のほど漢江（即漢口）及び南京に在りしが、…陸技軒（即鏡若）及び其の弟の…陸掬軒（即露紗）、其他の留學生が手中休暇にて帰省せしかば、…」（括弧内万物博士）。また、張園の舞台を「此の新劇場は昨年の末氷滑りをする為め新築せし家屋にて、二十間に五十間ばかりあるべし。此の大建築の中へ、日本式の舞台を造りしも、花道だけは無し」と記し、その『ボンドマン』（中国名『愛海波』）の舞台については、「幕は吊り下げにて、文字は支那人が描き、絵は当地石川洋行に従事せる陶器画工に描かせたり。鳴物は洋楽にて、例の如く舞台前にて奏し、背景は当地三頭洋行が引受けて、油絵にて、此れだけは日本のより優れり。大道具、立樹、釣枝、日覆、霞幕、すべて日本式とし、鬘も日本製を用ひたり。…本舞台も三間の上下もあり、電気を用ひ、硫黄山の場は油絵の背景の山より、赤き火花を閃かし、支那人の眼を驚かせり。…且つ役者も上手なり。女にチャホヤ言はれるが目的といふ浅はかなる動機にはあらず、或る深き意味より」と、この劇団を組織した趣旨も述べているのである。^{註83}

その物語は全く中国化している。上海人がフィリピンでスペイン娘と結婚して一子をもつけるが妻子を捨てて、中国に帰り再婚して異母弟ができる。このフィリピンと中国を舞台にした異母兄弟の奇抜で教奇な運命を描く。この時の配役がわかっている。農家の娘麗娟に王鐘声、異母弟に陸鏡若、異母兄が鏡若の弟の露紗、鐘声と行動をともししていた京劇役者の羊喜寿が麗娟の父役、万鉄柱が巡查（ともに北京玉成班の役者）、そして上海の春仙

茶園の園主で京劇役者の熊文通（一鳴）が老牧師、これまた鐘声と天津初演からの共演者・蓬萊居士は通訳官や士官甲。惜秋は士官乙や下女、それから癩癩も士官丙と下男をやっている。最後二人の日本留学生俳優は、鐘声が漢口で共演した後、そのまま上海に同行した。あるいは、この二人が陸鏡若らとの橋渡しをしたのかも知れない。因みに、徐半梅はこの劇で通訳官と隣家の女甲を演じている。^(註84)

七 三度目の北京公演

七・一 公演状況

一九一〇年秋十月、鐘声は再び北京に入っていた。その公演場所はやはり田際雲の天楽園で、十月六日『血蓑衣』、翌日続いて同劇の二本をやった。これは、陸鏡若が日本の村井弦斎作『尚美人』をもとに、陸鏡若らによって訳されて上演されたようだ。別名を『俠女伝』、『俠女鑑』あるいは『都督夢』という。また、任天知の進化団のレパートリーだったというから、鐘声はどちらかの影響で習い自分のものにしたのであろう。それから、漢口ですでに上演した『仇情計』（『離情記』ともする。仇と離は異体字、計と記は同音異字）を八日に、九日十日『宦海潮』、十一日『血涙碑』、十二日『熱涙碑』、十三日『仇情計』、十四日『血涙碑』と連日公演し、その後の記録は未詳だが、二五日『熱涙碑』が見える。いずれも天楽園である。^(註86)

当時、天楽園では基本的に夜劇をやったようだが、他の劇場ではマチネードとある。そして十一月に入って十九日に丹桂園で『杜十娘』、二八日と二九日に文明園で『宦海潮』『沈香牀』と『滑稽魂』をやり、^(註87)十二月には五日に全本『血涙碑』^(註88)、六日丹桂園で『沈香牀』、六日には同時に天楽園で昼夜『抱不平』を上演した。^(註89)翌日はまた

丹桂園で全本『恨海』を演じた。^(註90) この当時の共演者は、宝筏、光華、亜方、癩々などであった。この後、年を越して、二月二三日天楽園で『杜十娘』を上演してから、その後の記録は未詳である。今回の演目は、確かに任天知や陸鏡若ら日本で新劇を見てきた新劇人の影響を多分に受けて、鐘声の演劇も質量ともに豊富になっていったといえよう（筆者は鐘声ほどの人物が日本留学生なら必ずしも任、陸からこれ程の影響を受ける必要はないと考える）。また、北京公演の洋楽演奏には、鐘声が初演の時に美術学校の経費のための慈善公演した、その美術学堂の学生が担当した。^(註91) これらの学生は美術学堂の中の音楽コースで習っていたようである。彼らは劉木鐸の上演の時にも協力していた。

とはいえ、この頃になると、集客力が弱くなっていったようだ。新聞紙上にもあまり取りあげられなくなっている。この間の事情を、四年後の雑誌にはこう記している。「鐘声、木鐸が初めて北京に来たときは、天楽園で観客も多かった。数月後になって、丹桂で上演し文明でやったが、観客は寥寥たるものだった」と述べている。^(註92) なお、この一九一〇年十一月、田際雲が発起人となり、国会早期開会を祈念して天橋でお祝いの各種「文明新戯」を小屋がけ舞台上演しようとし、その賛同者に北京にいた王鐘声は「王熙甫」の署名で名を連ねている。^(註93)

七・二 公演の二演目の内容

『仇情計（『讎情記』）』は、芝居の途中に即席の演説が挿入されるといふ、当時の趣向をみせている芝居である。まず、楊家の老夫婦が出てくる。二人の息子の結婚問題で、光華扮する弟の楊少山とは反対に、兄は醜男で愚か者であったので、老夫婦大いに悩んでいる。下男の機転で、弟を兄の替え玉として張家の娘と庭園で会わせることにする。張家の娘が洋装であることを知っていた下男は、少山も洋装にし中国帽を西洋帽に取りかえた。弟は

約束の時間が三時なので、西洋時計を出して時間を見計らって庭園に入る。鐘声扮する張家の娘は洋装でブーツを履き細袖にタイトなウエストとロングスカートで美しい庭園を背景にした舞台に登場。楊少山はこの娘に名刺を差し出すと、娘は少山に学校のことを尋ねる。少山は学校の名前や組のことを告げ、求めに応じて英語を喋ると娘は満足する。娘はまた学校で何をしているかと尋ねると、少山は団結して授業をボイコットしたり街に行つて喧嘩したりするというと、娘は小団結より大団結がよい、私団結より公団結がよいと論ず。少山は大団結、公団結とはなにかと尋ねると、張家の娘は団体を結成し政府に国会を早く開くよう求める、これこそが大公団結だという(ここで観客から拍手が大いに湧く)。教語言葉を交わして、娘が我々はなんのために来たのかと問うと、少山はしばし言葉が出ない。しかし最後には、互いに意気投合し指輪を交換し、娘は自分の胸の花を少山の胸に飾る。それを見ていた兄は、二人が離れて、弟が出てきたときに、その指輪と花を奪って行つた。

楊老夫婦は二人の結婚話がうまく運んだのを喜んで、関先生に仲人を頼むことにした。そこで、関先生が普段着で登場(観客がまた拍手。この関という人物はある新聞社の主幹で、学問、経験ともに豊かであり、登場して新劇を賛助するといったので、拍手歓迎されたのである)。関先生はそこで演説した。文明的結婚は文明的な家、社会を作り、それで富強な国家ができると慶賀の気持ちを表す。演説が終わると、楊少山の父が礼をする。音楽が奏されると、新郎新婦が天地と互いに向かい合つて礼拝をし、年長者にも礼をして引き下がる。

そして、新婚初夜に、張家の娘は楊家の兄が来ているの知らず、その醜い容貌を鏡で見たので怒り、誰かと尋ねる。さらに指輪をもっているかと聞くと、指輪をもつて近づいてきたので兄を叩く。兄は倒れて大声で叫んだ。聞きつけた楊家の両親が仲人に相談すると、関先生は苦しげに一生添い遂げなさいと勧めるが、張家の娘は自分の相手はこの人ではないといい、神聖不可侵の自由権をどうして侵すのかと怒って出て行つた。

話は途中だが、夜の十二時にさしかかったので、条例に従って、劇場の支配人が閉幕を告げた。この結末は未詳で、かつ関先生なる人物の発言にも矛盾があるが、若い女性の自由結婚と女性の権利、そして女性の政治意識を前面に押し出した作品が、ある種の新鮮みと興奮を与えたことは容易に理解できる。^(註9)

もう一劇は『熱涙痕』四幕物で、『トスカ』を当時の中国風に翻案したものである。これも、鐘声が上海で習得したものであろう。惜秋扮する侯爵夫人（張夫人）が登場して、侯爵の帰りが遅いといつて程なく、侯爵が帰宅する。夫人は公爵に自分の願いを聞いて欲しいとせがむ。それは監獄に捕まっている革命党員周振之が自分の実弟でその罪を軽減してほしいということであった。公爵は絶対できないという。夫人は出て行って首を吊ろうとするので、公爵は仕方なくその方策を聞くと、夫人は二万の銀子があればできるといので、下男に取りに行かせる。用意した金を持参して牢屋に行き弟に会う。囚人服を着て手枷足枷、瘦せこけた姿に、夫人は思わず号泣した。夫人はすでに牢番には話をつけたから逃げようという。弟は罪を軽減してもらえばよいので、万一逃げて捕まったら罪はさらに重くなると躊躇するが、姉が急がすので逃亡した。牢番は毒を喰らわば皿までと、受刑者全員を逃がしてしまった。万鉄柱扮する巡査部長が警官達と登場し牢屋を見ると誰もいない。他の受刑者はよいから党員だけは捕まえろと命ずる。

亜方扮する画家陸蘭（梗概では蘆仲明とする）が野外でスケッチをしていると公爵夫人が逃亡中通りかかる。陸蘭はその美貌に魅せられて絵をかく。この時、鐘声扮する陸の妻（女優の薇娘）は絵の具を取りに帰る。陸蘭が描き終わった時に、林の中で音がしたので近寄ってみると囚人服を着た男だった。そこで陸蘭があれこれ尋ねると、周振之だと名乗ったので、同窓生だとわかる。陸は驚き二人は抱き合って泣いた。陸蘭の妻が戻ってきたので、慌てて周振之を隠しそわそわした。妻の薇娘は美人の侯爵夫人との仲を疑ったが、陸蘭は強く否定した。

妻が去って行った後、ここは危険だから自分の家に行つて隠れた方がよいといつてつれて帰る。すると、夫人がやつて来て周振之はいるかと尋ねる。最初はいないとごまかしていたが、その人は自分の弟で逃亡資金を渡したといつたので会わせる。お金を渡すと夫人は出て行き、入れ替わりに薇娘が憤激した様子で入つてきて、床の絹のスカートを見つけ、これは誰のか問い詰める。それは弟に金を渡す時に、夫人がうっかり落として行つたものだった。そのスカートの香水に二人の口論は止まらないので、周振之が衝立の裏から現れて全てを話した。この時、警官達が追いかけてきて、林の中で囚人服を見つけ、絵も道端にあつたので、画家陸蘭の家に行つてきた。陸蘭は警官達が来ると知つて慌てっていると、妻は枯れ井戸がよいと勧め周はそこに隠れる。警官が尋問するが教えないので、陸蘭に針のいっばいついた刑帽を被らせた。厳しく責めたてたあまり、陸蘭が気絶してしまつたので、妻はついに枯れ井戸に周がいることを教えてしまい、警官に周と陸双方とも連行される。

警察署で警官が酒を飲んでいると、陸の妻が来たので、酒の相手に来たのか、それとも亭主のために温情をたのみにきたのかときく。温情のためなら入れないといわれたので、妻は仕方なく酒の相手をするという。むりやり酒を酌み交わすうちに一計を案じた。左手で盃をもち右手はそつと机の上の包丁を握つて、私が綺麗かどうか尋ね、警官が頭を上げたところでその喉を包丁で突いた。立ち上がろうとする警官の胸にさらに一突きすると警官は死んでしまつたので、妻はそこから逃亡した。

執行官が登場。そして周、陸ともに縛られて登場。周は自分のために陸まで同罪にあつたことを詫びると、人生は一場の夢だから友達の義侠心が大切といい、さらに今の社会では民衆に知識がなく、無知蒙昧の人生を送り死んでゆく。余りにも無意味だ。いま我々は死んでも名が残るからなんと痛快ではないかという。周もこれに応じて痛快だと高笑いをしたところで、執行時間がきて二人は銃殺された。妻がとんで出て来たが、すでに共に死

んでいたので、慟哭してから自分も殉死した。^(註95)

以上が梗概である。この芝居は、「救党」「受刑」「刺警」「殉夫」の四幕物にしている。ここでは、革命党の周振之と、それに同調、同情する人々がクローズアップされているのであるが、後半の二幕名が「刺警」「殉夫」とあって、薇娘（つまりトスカ）に演出の焦点を当て、それを王鐘声が演じているのである。

八 王鐘声最期までの経過

八・一 北京での逮捕事件

王鐘声が北京で警察沙汰になった最初のニュースは、一九一〇年十一月二五日の北京の紙上に見える。この記事からは詳細はつかめないが、鐘声と彼を北京に招いた天楽園の園主・田際雲との悶着らしい。ただ、この時は簡単に解決したと見えて、旧暦の十一月から、鐘声は文明茶園に所属するから、際雲の天楽園はこれから観客が減るだろうと^(註96)いっている。これは、鐘声と際雲の契約上の問題ではないかと推察できる。^(註97)

一九一一年七月、田際雲の逮捕事件が起こったが、その明確な容疑が不明なままに、釈放された。^(註98)ところが、その後、すぐに鐘声も逮捕され、今回は前回とかなり趣が異なっていて、役者同士のいざこざといった性格のものではなかった。その経緯を天津『大公報』はこう述べている。「田際雲の事件について、裁判所はまず田の罪名を新劇で人心を煽動（「煽惑人心」）したことだとしているが、演劇の主演は王鐘声だから、警察に鐘声を調査してもらった。警察は毎日調査してようやく端緒を掴み、浙江会館の管理人の告発に至ったのである。鐘声はもと金台旅館にいたのに突然浙江会館へ移り住んできた（会館は原則的に無料であったが紹介が必要であった——吉

川)。毎土、日、月曜日は夜劇があり十二時過ぎでないと帰ってこない。帰ってくる時は弟子と称するやくざな奴らが一緒に入ってくる。連夜マージャンをやり騒ぎまくるので全館が不穏で、戸締りにも困るから、管理人は非常に苦々しく思っていた。平素は弟子を集めて騒ぎ賭けをするので、全館の人達はずっと追い出して欲しいと願っていた」とあり、その後、人妻との女性問題や私娼を囲っていたとか、様々な醜聞がながれ、浙江の京官などを煩わせて大騒ぎとなった。結局、会館の管理人を立てて外城の警察に代理告訴をした。^(註四)

これによると、最初「煽惑人心」であったのが、鐘声は会館での行状が罪の内容と見える。しかし、上海では、本来の罪は別にあつたようで、上海『時報』に「田際雲事件は——吉川」新劇をやつて人心を煽惑したと罪名を付ければ片がつきやすい。だが、新劇で著名な王鐘声が忽ちこの時逮捕された。際雲が新劇で罪を得たなら、鐘声はその新劇で有名であり、田際雲の事件が結審した矢先に鐘声が捕まつた。これには関連があるのではないか。鐘声が入京以来、警察はその挙動を極めて注視していて、密かにその行動を探っていた。かつ舞台の発言禁止も書きつけた。多分、鐘声が頗る新思潮の持ち主なので警察も特に念入りにはやつた。ただ、いかんせん派遣したのが程度が低くてその上演の顛末も記すことができなかつた」から、そこで賭博を開帳した科で告発されたと述べている。^(註四)ここで、鐘声の芝居は北京で特別扱ひされていたことを知るのである。それは、同紙にまた、「各梨園は毎日上演する前に演目を当局に呈示し審査を受けて後、開演する。もし新演目なら、劇団主を必ず召喚する。ただ王鐘声の各劇だけは干渉されない」としているのである。^(註四)それは、入京の時に、外城総庁の長官王善荃が鐘声の新劇に一種お墨付きを与えたことでもわかるように、社会改良者として優遇したのである。とにかく、鐘声に「不安本分（分を弁えない——吉川）」と判決が下り、罰金銀十五両と護送して原籍へ帰らせることになつた。^(註四)しかし、護送中に、山東の德州で大水のため護送車が横転したりし、思わぬ逗留を余儀なくされたといふ。

八・二 帰郷後から最期の場合

原籍地に戻されたかも未詳だが、『北京日報』には、「王鐘声は原籍に護送された後、上海軍政府の参謀部長となる」^(註8)と書いている。徐半梅の回想によると、王鐘声は舞台を捨て革命に身を投じた。武漢の起義が成功した後、鐘声は上海丹桂第一台の楽屋から軍服と指揮刀を借りて、南市の製造局（武器製造局）攻撃に参加し、最後まで抵抗していた張士珩を降伏させたのが十一月四日のことで、上海の滬軍都督府が成立するのが十六日であった。^(註9)鐘声は陳其美都督の参謀となったが、徐半梅はさらに、鐘声が上海での成功にも満足せず、万鉄柱、徐光華、朱光明らを率いて北上し、天津で汪笑儂のところへ寄つたら、そこに袁世凱の息子がおり、鐘声の革命の来意を聞きつけて、その夜の内に逮捕されたというが^(註8・四三頁)、万鉄柱らは難に遭わず、宿泊場所も社会教育の演劇改良を推進していた移風樂会会長・劉子良の家だったのである。

そして、一九一一年十二月初旬の夜半、王鐘声は探訪局の楊以德によって逮捕された。その日付については、梅蘭芳の前掲文章によれば九月十二日とあるが、これは新旧の曆を勘違いしたための全くの誤りである^(註12；二二三頁)。十二月六日紙上には「十二日晚十一過ぎ」^(註10)即ち旧曆十月十二日で新曆十二月二日といい、『北京日報』も十二月二日説だが、七日の新聞では十二月三日説を取っていて一日ずれている。^(註10)恐らく夜半過ぎで、翌日の日付を取つたのであろう。

武昌の革命が成つた後で、すでに革命党人をむやみに逮捕しないという詔勅が旧曆九月九日(十月十一日)下つていたが、天津では張懷芝、楊以德らが鐘声に前科ありということで「著名な土匪」という口実をもうけて、ストーリー領事官に通知して逮捕してしまった。領事官側も訳がわからないうちにサインし、裁判所にも連れて行かないで、兵營の中で禁止されている拷問をしたが供述を得られないので、罪を捏造し偽の供述書を呈上して王

鐘声を銃殺したといふ。^(註卅)

天津『大公報』には書簡の形で当局の弁明が述べられている。^(註卅)「当局の王鐘声逮捕の一件について申し上げる。外部では、頗る革命党に対してかようにすべきでないという声がある。…王鐘声は新劇を業としているものの、実際は劇界のならず者で、表向きは文明の名をかざしながら、裏では詐欺行為をやっている」。このように書き出しているが、当時の新劇家はこの一か月前『大公報』に明記されたように、旧劇役者と違い「正当な営業」と認められていたから、^(註卅)ここでも「劇界のならず者」と非難しなければならず、あとは既述した宣統元年の大観新舞台の一件、そして北京での女性問題や原籍追放のことなどを述べ立て、鐘声を「無頼の匪」、「乱に乗じて煽惑して騒擾をおこす土匪」として逮捕したのであって、革命党員ではないとし、勅命に違反していないのだと、このようにいい訳をしている。こうした当局の処分はともかく、王鐘声が逮捕された理由に、次の二点がよくあげられている。徐半梅の回想で彼が粗忽な性格であって、自分の身分や来意を公然といふふらしていたこと（註8；四四頁）。もう一点は、逮捕時に鐘声がピストルや爆弾を多量に所持していたことが、また逮捕の容疑内容だといふことである。^(註卅)

逮捕の状況については、十二月五日の紙上に「天津探訪局が十二日（新曆十二月二日——吉川）移風会会長・劉子良の宅内で革命党員三名を確保、並びに爆弾多数を押収し、即刻オーストリア公署に引き渡した。翌日、巡警総局から天津鎮署に送り取り調べて処分した。革命党はすでに政党としてみなされ詔勅によればもとより逮捕すべきでないが、ただその爆弾を大量に蔵するの故に、当局に送って処分しなければならぬ」とあり、^(註卅)また翌日には「十二日晚十一時過ぎ、鎮署（あるいは探訪局）は人を遣って：オーストリア租界の于家大院にある劉子良宅で劉子良、王鐘声、朱植君（朱琦）および童（佟堯山）、呉（呉楚湘）、曹（曹恩祥）、陸（陸金浦）ら七名を捕

まえた。革命のことと関連があり、即刻鎮署に護送し、その夜の内に疙疽窪（演習場）に連行されたという」とある。^(註13)そして、七日にはもう少し詳しく、「当局は革命軍が北上して来るのを察知した。指導者は王某で十五日（新曆十二月五日——吉川）に事を起こそうと決めていた。そこで四方探りを入れてオーストリア租界の江家大院に隠れていると判明したので手入れをした。すぐに領事に通知しサインしてもらい、探訪局の楊以德が中外の巡查を連れて十三日夜、江家大院の劉子良宅で革命党九名逮捕した。その時、発砲し拒んだが取り押さえて逮捕状を提示した。ピストル、爆弾多数。逮捕された九名はまず督署に連れて行かれ、そこから營務処へ連行された。そこで張懷芝の立ち会いの下審議されたのである。首謀者は王熙普、即ち王鐘声で、その他は上海の学生である。鐘声は革命党と名乗って憚らず、政府を痛罵してやまなかった。すでに、昨日疙疽窪で死刑が執行された。その他の者は隠れていた皖北の残党で、さらに尋問しなければならぬ。劉子良は尋問の際、慟哭してやまなかった。鐘声はかつて上海で民軍によって参謀に選ばれたのだから革命軍と関係があるのだ」と述べている。

王鐘声の刑死の日時については、七日の『順天時報』に昨日とあるから、十二月六日に刑が執行されたということであろう。梅蘭芳の文章では、玉成班の李玉桂が弟子で実際に見た徐来福から聞いた話として、十月十三日午後（新曆では十二月三日）とあり、それだと逮捕翌日ということになる。オーストリア領事館とのこともあり、いささか短時間ではないかという疑念も残るが、一方、やっかいな存在で、しかも反抗的なその性格から即決で処刑したことも十分に考えられる。

また、蘆懋原の「王鐘声」には、以下のようなことが書かれている。天津広徳楼ボックス席で同志が待ち合わせ、そこから宿舎に向かうときから当局につけられていた。そして逮捕されたときに、いくつかの嫌疑を尋問されたときに、鐘声はすべて認めた。処刑に際して、鐘声は大声で「丈夫は死すのみ。然れども必ず痛痛快快なり

てのち可なり」と叫び、そして刀斧での処刑を拒み銃殺を望んだ。刑に望んでヒゲをしごき長く叫ぶと山谷を震わせ、顔色一つ変えなかったとも述べている。^(註11)

ところで、王鐘声の卒年はこのように明白であるが、生誕年は数説ある。宣統元年（一九〇九年）だが、元年年末は一九一〇年の劍影客の伝記で明確な年代は、ドイツ留学の「戊戌」（一八九八年）で、この年に渡独したとあり、伝記の末で一九〇九年の年齢が「其年ようやく二六」とあるのを、書写年代から単純に遡って計算したのが一八八三年説である。満年齢で計算すると、生まれたのは一八八二年となるだろう。また、この翌年、漢口『中西報』に、記者自身が鐘声に直接会って聞いた「紹興人で十四歳のとき欧州に留学して八年で帰国し、いまはすでに二八歳になった」という経歴は、^(註12)劍影客のいう留学時期とは合わないが、生誕年代は劍影客が二六歳と記している、両者に大差ない。これに対して、近年多く一八七四年としているのは、恐らく朱双雲『新劇史』^(註13)本紀の「春秋僅か三十七のみ」を根拠に一九一一年の刑死を三七歳としてるところから逆算したものであろう。劍影客、石庵の二人と朱双雲の説には、七年から九年の差がある。広西にいて法政講習所で演説した時を、かりに劍影客説を取ると二六歳頃で、朱説では三三歳頃となる。いずれも可能性があり、即断しかねるので併記して参考に供したい。

むすび

処刑後一年余り過ぎた一九一三年一月二六日に、丁義華らの新劇団が北京湖広会館で「実事新劇」と銘打ち『王鐘声』を上演した。^(註14)さらに二年半して、烈公の「北京新劇史」が紙上に載った。いわく「それ中国新劇の提唱は

上海に始まり、幾ばくもせず失敗した後、王鐘声は北京で再起した。時に、清朝の専制期で、北京は官僚の巢くう所であり、社会の腐敗は極点に達していた。だが、王鐘声は毅然として提唱し身を挺してその不撓不屈の気概を表した。今でもこれを思うと肅然と尊敬の気持ちがおこり、その人となりを追慕する。…その事蹟を考えその偉業を思うと、余はその湮没し彰かならざること忍びがたく、…と書かれている。^(註25)では、彼の偉業と特徴とはなんであつたのか。

王鐘声は社会改革、とりわけ非識字の下層民衆啓蒙・教化に、演劇が最も有効な利器であるという信念を持っていた。これは二十世紀初頭の中国において、知識人達の共有していた認識でもある。しかし、それを実行する人材は、どこにもいるわけではなかつた。鐘声新劇の第一作『黒奴籲天録』初演後の写真にこう説明がある。「近年来、演劇改良の声があがっているが、時に生じ、時に消滅してゆき、にわかに行う人として現れない。その原因はあるいは己の地位を犠牲にすることに逡巡し、あるいは時間を惜しんで、消極的になつているからである。そこで、伶界の下賤なものに期待するというが、それなら尋ねたい。彼ら無知な輩に担えるものなのかと。そんな昨今、演劇改良はほぼ希望がないように思っていたら、この絶対に必要な折りしも、図らずも春陽社が現れた。馬湘伯や沈敦とお二人の提唱ではあつたが、組織し経営するには王熙普先生のお力が必要であつた。名譽を汚し時間を浪費して国民の犠牲となるのは貴君らを除いて誰がいよう。ああ春陽社の諸君、社会を教育し国民を引導するのは、諸君の責務ではないか。…」と、王鐘声と春陽社に対する称賛と期待を述べているのである。^(註25)

知識人達は既述の劍影客著『天津名伶小伝』のように新劇人を鼓舞し鐘声を尊崇し、口では民衆啓蒙の重要性を唱えながら、役者に身をやつすことを肯んじなかつた。心の内では侮蔑していたからである。旧劇役者「優伶」は中国の男子として生来平等に賦与されている科挙受験の権利を剝奪されていた。新劇人が不足していた当時、

王鐘声は社会啓蒙の目的で旧劇役者と共演した。同一視はされなかったが、舞台上では同類なので、やはり奇異な目で見られていた。こうした封建社会の侮蔑にさらされながら、昂然と立ちむかえたのも、やはりその信念があつたからだろう。

社会教育に情熱を注いだ彼は、「現身說法」という方法で民衆に説いた。それは、釈迦のごとく、様々な人間の姿になって、舞台から説法をすることである。鐘声は民衆覚醒のためならどんな演劇スタイルでもよかった。しかし、民衆に最も身近な伝統演劇は、その素地がなかったし、新様式として、新劇を選択したのであろう。しかも、正規の訓練を受けていないし、ある種のプロパガンダ演劇の目的が先行したため、盟友ともいふべき田際雲にしても、鐘声の口立て新劇には不満があつた。口立てであるから、往々「脚本によらず数人が稽古して適当に台詞を互いに組み合わせてやるが、役者同士うまく合わない。その上、適当に組み合わせた台詞もなん度も繰り返して出てきて、新鮮味に欠ける。しかも筋に関係なく発せられる」とか、「一つはアドリブで変えてしまうから相手は対応できない。それは脚本を基にしないからだ。もう一つは新語が多すぎて、あれこれ補足修飾して説明するので甚だ滑らかでない」とこぼしていたといふ^(註11)。新語といっているのは、上海の文芸新劇場公演広告に、「中英独日の名詞を話す」と宣伝しているから、北京でも外国語を舞台で連発し、新奇を好む観客を煙に巻いていたので、小さい頃から伝統演劇の稽古を積んでいた田際雲には、この不完全な演劇が理解できなかったのようだが、伝統の枠を打破し自由さを得させた功績はあろう^(註12)。

さて、鐘声の上演演目で特徴的なのは、第一作の『黒奴籲天録』のような民族解放劇、革命烈士劇、社会風刺劇(『官場現形記』など)を内容とし、男女双方を演じたが、ほとんどが社会的不正や個人的非道義性を鋭く追求して許さず、正義を貫くという話である。革命烈士『徐錫麟』はもちろんであるが、『愛国血』、『張汶祥刺馬』

などのように悪徳の人間を殺して自分も死ぬという人物である。女性を演じては、『秋瑾』初め『迦茵小伝』『猛回頭』『縁外縁』、『情讐記』などでは、いわゆる貞女烈婦ではない、激しい気性の女性、近代的な旧来の陋習を打ち破る、いわば女性解放の芝居を演ずる。これらの人物は旧劇には全く登場しない人物像である。ただ、このようなこれまでの北京の舞台に存在したことの無い女性が活躍するだけでは、いくら物珍しくとも観客は観に来なかっただろう。鐘声には、生来、演説で証明された口才と絵心で培われた画才が具わっていた。これが、彼が他の新劇人より優れたところで、鐘声新劇の真骨頂であったと思われる。

ペキンオペラと言われるように、北京では歌唱が最も重視され、「観客」ではなく名唱愛好の「聴衆」がいて、レコードの普及していない当時、安い入場料で芝居を「聴きに」来た。当時はマチネーしかなく、日暮れの早い冬などは役者の顔もろくに見えなかったが、聴衆は文句を言わず静かに歌唱に聴き入っていた。それが、新劇が到来すると、話の筋になじみがないから、台詞を聴き演技を見なければならぬ。鐘声が北京に来て、「説白新戯」と台詞劇を標榜して、歌唱なしで聴衆を感動させることが可能であることを証明した。北京は長らく女性の商業劇場入場が禁止されていた。解禁されて入場してきた女性達は、新奇な洋装の女性に扮した鐘声の口を通して、熱っぽく語られる新時代の思想に、好奇心と感動を覚え、あるいは溜飲を下げたに違いない。

それに加えて、わが能舞台のような北京の劇場に本格的大道具や背景、照明を持ち込んだことで、北京の「聴衆」を「観客」にした。やはり、これも王鐘声の功績であろう。上記の舞台美術が進んでいた上海で出された『新劇史』でも「わが国劇場の大道具あるは、実に鐘声より始まる」とその業績を認めている。彼自身若いときから絵画の素養があったことは、欧陽予倩の回想録（註7；十五頁）でもわかるし、天津・北京では「鐘声画景」と彼の舞台美術は当時特段の高い評価を得ていた。そして、欧陽の同じ回想録で、晩清の舞台機構で有名だった上

海新舞台に言及したときにも、近代舞台に美術の源を「王鐘声、任天知らの：春陽社に遡らざるを得ない」として(註7：10二頁)、鐘声が早期の中心的人物であったことを知る。当時夜劇で有名であった北京の広徳楼のものを遙かに凌駕するようなものであったから、京劇の歌に酔って「芝居を聴く」といつていた北京の客に、「芝居を観る」習慣を植え付けることになる。本来、夜劇が禁止されていた北京で、電灯が設置されて間もなくだったこの時期に、明るく浮かび上がってくる別世界の舞台に、観客は初めて新世紀の到来を感じたに違いない。

ところで、こうした鐘声新劇が、固陋な首都の北京で行われ得たものには、清末の「光緒新政」という特殊な政治的背景があったことを指摘しておかなければならないだろう。鐘声にとって、それは大きな意味をもっていた。すなわち、上述のごとく、社会を前進させ民衆を文明化するのには演劇が最適だという認識は、当時朝野問わず広く唱えられていた。しかも、中国本土にあつては、春柳社による日本の留学生演劇よりは、さらに直近の眼前にいる民衆を覚醒させねばならないという使命を新劇に担わせていて、王鐘声は自覚的にそれを実行しようとしたのである。北京初演の時、彼が破天荒な歓迎を受け、また当局のお墨付きをいただき、新作の検閲が免除されるという大変な優遇を蒙ったのは、それまで北京にはなかった民衆教化の新劇が留学を標榜するエリート学士(王鐘声)によって上演されるといふ期待感が充満していて、それを實際目の当たりに観ることで感激したからだ。北京には元々新政政策はあつても、演劇上の具体的な成果はさほどなかった。一九〇六年から、京劇ではなく、河北地方の梆子劇で、田際雲や崔靈芝などの役者が伝統様式によって現代物をほんの数劇慈善公演したくらいで、演目が甚だ不足していた。^(註四)そこで、新政の推進者であつた改革派の役者田際雲が鐘声を北京に招いたわけである。しかし、当初は大歓迎された鐘声の新劇がようやく飽きられた頃、観客も減って行くのに反比例して、鐘声の革命に対する思い入れはつのもり、舞台内外の言動は激しくなつた。そして武昌蜂起が成功すると、当局との対立

は尖锐化し、政府は新政実行の一環である新劇啓蒙の必要性は痛感しながらも、反政府的な新劇人たちの言動に対する取り締まり強化という矛盾することを実行しなければならなくなつた。^(註10) 新劇が現実社会の改良を旨とする以上、演劇に現実批判は当然出てくるのだから、そこで衝突が生ずる。したがって、最も目立つ存在の田際雲や王鐘声たちの逮捕となるが、罪状に苦慮し、常に誰しもがわかりやすい、女性との醜聞と人心を惑わし社会を騒乱しようとする策謀したという罪により、これに対処しようとした。彼の最期もまさに、光緒新政の実行者である新劇家としての存在を完全否定し、皮肉にも、社会改良の旗頭たる彼を、反社会的騷擾者、無法者と決めつけて処刑したのである。^(註11)

さて、「鐘声新劇」は、このような清末という特殊な時代の産物といえる。確かに、彼は時代の要請で登場した。正義感、志をもって改革、革命に身を投じた、いわゆる志士と称するにふさわしい人である。当時、北京の旧劇界は大御所の老齡化と、梅蘭芳など新人登場前のスター空白時であったから、王鐘声の文明新劇は異常な興奮をもって迎えられた。しかし、旧劇の落伍性を克服して、新しい演劇芸術を創造するというようなことは、鐘声にあつては最大の関心事ではなかつた。だから、このような未成熟な演劇ではあつたが、鐘声は朱双雲『新劇史』〈本紀〉でも中国新劇の「水を飲むとき源を思ふと、功を王氏に帰さざるを得ざるものあり」と称えているから、革命家として余りにも強烈な最期を遂げたので、そちらに注目されがちだが、死後まもなくの新劇史上でその功績も認められているのである。

刑死後、一か月も経たぬ一九二二年一月一日、孫文が南京で民国の成立を宣言した。民国は迎えたが、京劇の牙城・北京はなかなか新劇を受けいれなかつた。それでも、鐘声のもたらした現実社会を写し改革を唱えた舞台の演技や、舞台を観る習慣が、やがて梅蘭芳や女優劇の登場によって定着し、同時に舞台装置や劇場の美化も進

んだ。また「現身說法」的な役になりきって社会に訴えかける演劇が、民国初期の演劇に受けつがれたし、演劇の社会的役割も認知された。これらも王鐘声の直接的、あるいは間接的な影響と考えられるのではないかと思われる。

王鐘声は中国国内で新劇を舞台にかけて旧劇の観客に立ちむかった最初の人であって、筆者の関心はそこにある。鐘声の演劇的試行錯誤に関しては、初演から百年目に当たる今日でも、まだまだ研究、資料発掘と吟味する余地がある。そこで、これを二攷として次攷を期したい。

註

(一) 今日の中国では、日本の新劇に当たる科白劇を「話劇」と称する。当時の「新劇」、「新戯」という語の含義は、単に新しい芝居ということで、特に具体的形式を指してはいなかった。歌唱や音楽、型を排除した科白劇が日本留学生の中から提唱されたのは、旧劇と決別しようとする強い意志があった日本の新劇の影響を受けたからであろう。だから、当時の中国本土にあっては、とりわけ北京、天津などの北方では、新劇俳優の技量の問題もあって、とてもロングランでできるような名作の名優による名演技などは、望むべくもなかったのである。もちろん、日本留学生の中には明確に今日の「話劇」という意識を持っているものもいたであろうが、創始期の、とりわけ王鐘声においては、その形式より演劇の民衆教化に重点があったから、民衆に受けいれやすい形式を適宜採用したのも頷けよう。拙論では、この時代の新しい劇を、便宜的に「新劇」という言葉で統一している。もっとも、鐘声新劇は日本留学生と共演する過程で、徐々に現代の中国でいう「話劇」に接近していった。もっとも、北京『順天時報』（以下、『順』と簡写）一九一五年四月二三日「潜圍戲談」に、小謝の署名で、「亡友鐘声は中国新劇の鼻祖であり劇界革命の大偉

人だ。：しかし予の主張と鐘声の主張は正反対で、鐘声は演唱や旧劇が本来もつ種々の習慣を廃棄するよう主張した」とあり、王鐘声は本来いわゆる「話劇」風の科白劇を念頭においていたが、初演の共演者が京劇の愛好者であったり、庶民に馴染みのなかったこともあった上に、科白劇の演出法に熟達していなかった可能性もあり、結局後述の徐半梅の批判にあったような中途半端な形式を取らざるを得なかったのではないかと思われる。

なお、新聞の記事はすべて西暦一九〇〇年代なので、一九一五年なら「一九」をすべて省略し「一五年」とする。新聞記事以外はそのまま。

(2) 一〇年七月卅日上海『時報』及び『申報』の「張園文芸新劇場」広告、北京『民主報』一三年二月二日巨公へ劇談『鐘声新劇』。

(3) 「王鐘声と辛亥前後の北京劇界」(『多摩芸術学園紀要』第3巻 一九七七年)。

(4) 事典などでは「槐清」を本名とするが、実際の活動では全く使用されない。

(5) 上海『同文滬報』一九〇七年七月三十一日、八月一日へ代論「上虞王熙普君致商務總會書」、同年八月二日、三日へ寄書「王熙普致商務總會及商學公會書」や同年十月一日へ言論「王熙普君創設春陽社意見書」、『申報』一九〇七年十月二日、天津『大公報』同年十月十五日「春陽社意見書」など。但し、本名というものが革命期の当時、どれほどの意味があったかわからないが。

(6) 『順』一〇年一月二十九日「鐘声新劇」。また、東京で設立された春柳社の『春柳社演芸部専章』(『北清雜誌』第卅巻 一九〇七年)に東京の下谷池之端においた春柳社の事務所名が「鐘声館」であって、王鐘声がそれを参考にしたのかは未詳だが、なにか関連があるかも知れない。

(7) 『自我演戯以来』(神州国光社 一九三九年 上海)。

- (8) 『話劇創始期回憶録』(中国戯劇出版社 一九五七年 北京)。
- (9) 宣統元年旧曆十二月に天津の各省大書坊で印刷。『順』一〇年五月五日「名伶小伝」によれば、実際の刊行は一九一〇年五月頃のようにだ。
- (10) 未詳。中国発行の多くの辞書に「得来伯的西」大学とあるが、原文「入得来伯的西」の「得」は「入得」で、「来伯的西」はライブティツヒ大学か。
- (11) 『辛亥革命回憶録』「同盟会在桂林、平樂的活動和広西宣布独立的回憶」四五八頁(中華書局 一九六二年 北京)。
- (12) 『梅蘭芳文集』「戯劇界参加辛亥革命の幾件事」(中国戯劇出版社 一九六二年 北京)、『歌舞伎』「支那の新演劇」百二三号(一九一〇年九月)。また、朱双雲『新劇史』(中国新劇小説社 一九一四年 上海)所収の沈所一「勸学篇」に「鐘声が東に渡り、これ(日本の新劇——吉川)を見て善しとし帰って春陽社を為す」とあり、徐珂撰『清稗類鈔』「戯劇類・学生為優」(商務印書館 一九一七年 上海)にも「光緒の時、日本留学の人士が春陽社を創立し新劇を習って演じた。王熙普は自ら鐘声と号し、またその一人だ」と日本留学生説を取っているが、どうだろうか。
- (13) 一〇年五月二二日、石庵「大舞台観劇記」(続昨)。
- (14) 一〇年五月十六日、漢舞台の広告。徐光華も英、米の留学生という。これについては後述参照。
- (15) 閻折梧編『中国現代話劇教育史』第一章(華東師範大学出版社 一九八六年 上海)所収の丁羅男「辛亥革命前後的話劇教育」。
- (16) 『鈞影樓回憶録』四一一頁(大華出版社 一九七一年 香港)。
- (17) 『申報』〇七年十一月一日「春陽社成立広告」。

- (18) 『同文滬報』十月一日「王熙普君創設春陽社意見書」。
- (19) 柏彬『中国話劇史稿』十四頁（上海翻訳出版社 一九九一年 上海）。
- (20) 註8〈無人参考的参考品〉「ADCは必ず蘭心で上演しADCと蘭心は密接な関係あった」とあり、したがって上海音字「愛（A）提（D）西（C）」大戲院も蘭心のことであろう。
- (21) 『同文滬報』〈言論〉「觀春陽社演有感」。
- (22) 『中国の新劇』二二頁（昌平堂 一九四八年 東京）。
- (23) 註8「春陽社与王鐘声」。但し、欧陽予倩「談文明戲」五三頁（『中国話劇運動五十年史料集』第一輯 中国戯劇出版社 一九五八年 北京）には、当時の状況下で鐘声がなしたことに一定の評価を与えるべきだとしている。
- (24) 註15の十頁。
- (25) 『月月小説』十二月号「春陽社社員劇裝撮影」（一九〇七年第十二号 上海）。註15；十一頁に、通鑑学校から汪優游、查天影、蕭天保、陳鏡花などが育ったとある。
- (26) 黄颺『海上新劇潮』九九〜一〇四頁（上海人民出版社 二〇〇三年 上海）。姚旭峰『梨園海上花』二八頁（上海人民出版社 二〇〇三年 上海）にも、通鑑学校が春陽社という名前を使って公演したと述べる。通鑑学校については、註15の九頁〜十一頁に詳しい。
- (27) 註8「一趕趕三的任天知」。
- (28) 〈春秋〉および註8「上補習課」。徐半梅は鐘声と一緒に行った生徒はろくな者がおらず、ほとんどが任天知について行ったという。また、上記徐珂撰『清稗類鈔』「戯劇類・学生為優」に「∴生徒を連れて杭州に行き、中学卒業生を募集して俳優にしようとしたが、教育会がこれを阻止した。他のこともあって、浙江巡撫に追放され上海に

もどってから春桂戲園で公演した」といつている。

(29) 註12『梅蘭芳文集』「戯劇界参加辛亥革命的幾件事」二二頁および『新劇史』〈春秋〉。

(30) 十一月四日「關於天津地方自治之文件」第七十八條五。

(31) 一〇年十二月二日「論報館与戲子」。

(32) 鐘声については北京の新聞にいうとおりだが、木鐸については、上海『時報』一一年八月八日「田際雲王鐘声両案始末記」。

(33) 任二北編著『優語』二七〇頁（上海文芸出版社 一九八一年 上海）。

(34) 註12『新劇史』〈春秋〉に、天津で刑死した時も朱双雲は「死于燕」と記すし、北京での活動などには全く言及していない。

(35) 広告には左から「新到洋上」と書いてあつて、当時は右から読むべきだが意味が通じない。上の劇場名も「天仙園茶」と誤植しているから恐らくこれもミスであろう。

(36) 『順』〇九年五月二六日「堂子浴仏停辦」。

(37) 『順』〇八年十二月二四日「外総庁之体恤梨園」。

(38) 『順』〇九年三月七日「查封戲園」。

(39) 『順』同年三月十日「将演説白清唱」。

(40) 『順』同年四月九日「准予開演」。

(41) 天津『中外報』一九〇九年七月十八日。

(42) 『順』〇九年九月十一日「新大舞台」。

- (43) 『順』一〇年三月十三日「女伶新劇」、および十八日「女伶進歩」。天津『中外報』〇九年十月二日〜二四日。
 (44) 〈天津通信〉「熱心新劇」。
 (45) 一〇年四月五日「有志無力」。
 (46) 同紙四月九日「来函」。
 (47) 『順』〇九年八月二八日「電光夜劇」。
 (48) 『順』十二月二六日「警世時劇」。
 (49) 註3「王鐘声と辛亥前后の北京劇界」参照。註29『梅蘭芳文集』などでは、一九〇九年の冬としているが、彼の刑死が一九一一年十二月三日であるのに十月十三日としているのと同様、旧暦月日を新暦と誤解した誤りである。
 葛一虹主編『中国話劇通史』（文化芸術出版社 一九九〇年 北京）、『近代上海戯曲繫年初編』（上海教育出版社 二〇〇三年 上海）など、みな同様の誤りをしている。
- (50) 『順』一〇年二月五日「鐘声新劇（六）」。
 (51) 『順』一月二六日「鐘声新劇助捐学款」。
 (52) 『順』一月二九日「鐘声新劇（一）」。劍嘯嘯「中国的话劇」二二六頁に、同行者は楊亜芳、徐光華、葉（萬の誤植）鉄柱で、上演演目には『宦海潮』『新茶花』『秋瑾』『徐錫麟』『張汶祥刺馬』をあげ、さらに「彼らは一つの一座を組んで来たのではなく、往々旧劇劇団（玉成班——吉川）に加わって天楽園に出演した。切符は高くなく四、五十銭に過ぎなかった」とある（『劇学月刊』第二卷第七八期合刊（南京戯曲音楽院北平分院研究所 一九三三年 北京））。
- (53) 一〇年五月二一日「大舞台観劇記」。

- (54) 『順』同年三月一九日「戲本暢銷」には田際雲作『越南亡国慘』が二千五百冊売れたとある。だが、新編劇の脚本が単行本として売れることは当時ほとんどなく、これは希有の例で、脚本というより世間への警鐘・教育を目的としたものだろうと思われる。
- (55) 『順』一〇年一月二九日、二月五日「鐘声新劇(二)」(一六)。
- (56) 『順』同年二月六日、十七日「鐘声新劇(七)」(九)。
- (57) 北京『民主報』一三年二月二日巨公「劇談」「鐘声新劇」。
- (58) 一〇年五月二一日石庵「大舞台觀劇記」。
- (59) 一〇年一月卅日「王序丞嘉贊新劇」。
- (60) 一〇年二月二日「新戲旧戲」。
- (61) 『順』一〇年二月五日「鐘声新劇(七)」。
- (62) 『支那近代劇の変遷』一九三〇年代中頃の成書。
- (63) 『順』一〇年三月九日「光華新劇」に、光華を紹介して、広東山水県出身。本名は徐文翰で、天津の鈴鐸閣中学堂卒業とあり、漢口『中西報』一〇年六月六日「滿春茶園」の広告に「徐君光華、留學英國」とある。
- (64) 『順』一〇年三月一〇日「木鐸新劇」。
- (65) 『順』一〇年二月二五日天津通信「將演改良新戲」。
- (66) 『順』三月四日「鐘声將到」。
- (67) 『順』一〇年三月十八日「木鐸同來」。
- (68) 『順』一〇年三月二十日「鐘声出京」に張汶祥の事件と北京では禁演とある。

- (69) 『順』一〇年四月一日「国恥公籌備情形」、五日「国恥紀念会籌款」および十二日「国恥会經費難籌」。
- (70) 『順』一〇年四月一六日「瑣事雜誌」に「杜十娘怒沈百箱」を「上海では常演されるが北京では初演」とある。
- (71) 『順』一九一〇年四月一日〜七日「鐘声新劇又誌」。
- (72) 『近代上海戯曲系年初編』五六頁（上海教育出版社 二〇〇三年 上海）。平江不肖生『張汶祥刺馬案』（中国文联出版公司 一九九六年 北京）
- (73) 『順』四月八日九日十日「縁外縁」。
- (74) 『順』一九一〇年四月一六日「瑣事雜誌」。
- (75) 『順』一九一〇年六月二日「木鐸出京」。また、鐘声と木鐸の確執については、一二年八月二日「田際雲王鐘声両案始末記」、上海『時報』一二年八月八日にも転載。また『時報』一二年一月五日「急進会之成立」に「奉天革命党員劉芸舟（即ち木鐸）」とあって、ついに民国成立以前は北京には帰っていないようである。
- (76) 『順』一九一〇年六月六日「劇界近事」。
- (77) 一〇年五月十六日から五月二六日までの演劇広告。
- (78) 『時報』八月十一日〈劇談〉「附言」に「昨日の芝居（猛回頭——吉川）は素晴らしかったが、観客はまばらだった。だが、出演者は動ぜずに一所懸命にやった。本来この種の芝居は文芸的な価値があつて浮ついた輩にはわからないのだ。…」とある。
- (79) 『時報』及び『申報』演劇広告、七月卅日、八月六日、十日、十一日、十二日、十三日、十四日、十六日、十七日、十八日。
- (80) 『時報』八月十四日「中外日報十二週年紀念大会記事」。

- (81) 〈劇談〉一九一〇年八月三日。
- (82) 『時報』〈劇談〉八月八日。
- (83) 『歌舞伎』百二十三号(歌舞伎発行所 一〇年九月一日)。
- (84) 河野真南「春柳」の帰国——上海・張園文芸新劇場公演まで(『演劇研究』三四号 一九九三年)には、この時の上演に関する論述がある。
- (85) 飯塚容「血蓑衣」をめぐる(『中央大学文学部紀要』二〇〇〇年三月)。
- (86) 『順』十月十二日〜十六日、十一月三、十一、十二、十五、十六日の各〈瑣事雜誌〉。
- (87) 『順』一〇年十二月二日「白日鐘声」、北京『中国日報』一九一〇年十月卅日 吹劍「鐘声之戲」に『沈香牀』に關するコメントがある。
- (88) 『順』一〇年十二月七日「丹桂鐘声」。
- (89) 『順』一〇年十二月八日「昼夜鐘声」。
- (90) 『順』一〇年十二月九日「鐘声恨海」。
- (91) 『順』一〇年十月十六日「仇情計新劇(四)」。
- (92) 『戲劇叢報』魂郎「北京新劇失敗之原因」八頁(上海戲劇叢報社 一九一五年 上海)。
- (93) 『順』一〇年十一月九日「慶賀国会誌盛」、北京『開通画報』一〇年十一月九日「慶祝国会」。
- (94) 『順』一〇年十月十三日〜十六日「仇情計新劇」。
- (95) 『順』一〇年十一月三、十一、十二、十五日「詳記熱淚痕新戲」。
- (96) 『帝國日報』「劇界片々」。

- (97) 上海『時報』一一年七月十八日「田際雲案之秘密統史」。
- (98) 天津『大公報』一一年六月五日「田際雲案有制定之耗」。
- (99) 一一年八月一日「田際雲案奏結之内容」。
- (100) 天津『大公報』一一年七月二〇日「王鐘声被逮始末記」。
- (101) 上海『時報』一一年七月二一日「田際雲与王鐘声」。
- (102) 上海『時報』同年同月卅日「孽海花之結果」。
- (103) 天津『大公報』一一年八月一日「田際雲案奏結之内幕」。上海『民立報』一一年八月六日「田際雲案判決詞」。
- (104) 上海『時報』一一年十月八日「新優王鐘声之行蹤」。
- (105) 一一年十二月五日「王鐘声之被捕」。
- (106) 『清史編年』十二卷六〇三頁(中国人民大学出版社 二〇〇〇年 北京)。なお、『民立報』一一年十月二六日「丹桂第一舞台演劇助捐」には、十一月一日に上海丹桂第一舞台で「鄂乱」の負傷者救済のため、中国赤十字会に経費援助をする慈善演劇を王鐘声も参加してやるとある。
- (107) 『順』へ是真革命党乎。一三年一月十一日北京『民主報』「王鐘声昭雪紀」には、上海の革命が成功した後、北上してまだ革命されていない北京や天津の同志と共に謀することを託され、旧曆十月九日夜に天津に到着し劉子良の家に泊まった。十一日夜に白楚香、董荒山、陸金圃など諸同志が密議をしているところへ、探訪局およびオーストリア租界巡警多数がピストルを持って入り、王鐘声が参謀の軍服を着ているのを見て捕縛し、董、劉、陸らを同時に逮捕すると天津鎮署に連行した。鐘声は深夜吹雪の中を疙疸に連れて行かれ銃殺された。裁判尋問は全くなかった。白、劉、董、陸は政府に働きかけて釈放されたとある。

- (108) 十二月五日「天津拿獲革党」。
- (109) 『順』「天津拿獲革党之詳情」。
- (110) 上海『時報』一一年十二月十九日。
- (111) 一一年十二月九日「来函」。『民立報』一一年十二月十一日「陳夔龍之罪狀」、同十二月十七日「漢妍不敢出頭」同日「暗無天日之天津」で、逮捕、処刑の不当なるを指摘している。
- (112) 同上『順』七日「天津拿獲革党之詳情」と『北京日報』五日「天津拿獲革党」。
- (113) 北京『民主報』一三年一月十一日「王鐘声昭雪紀」。
- (114) 『革命人物誌』第一集一八二頁～三頁（中央文物供应社 一九六九年 台北）所収の盧懋原「王鐘声」（『党史匯編』「党史会蔵」より引く）。
- (115) 北京『民主報』一三年一月二一日の演劇広告。
- (116) 『順』十四年六月卅日。
- (117) 上海『時報』一一年七月十八日「田際雲案之秘密続史」および同紙七月二一日「田際雲与王鐘声」。
- (118) 『時報』一〇年八月六日「張園文芸新劇場広告」。
- (119) 田の作った『惠興女士伝』と崔の『女子愛国』。「晚清北京の戯曲改革と秦腔」（『人文学報』一一二号所収 東京都立大学人文学部 一九七六年）参照。また註12『新劇史』〈春秋〉に「燕京初めいわゆる新劇なし。崔靈芝が惠興女士新劇を演ずるが、…純粹の新劇にあらず。新劇の出来たのは王鐘声から始まる」といっている。因みに、『惠興女士伝』を上演したのは田際雲である。
- (120) 王鐘声を捕らえた楊以德は民国に入っても、私服警官をオーストリア租界の東天仙に遣って上演中の新劇家の謝

冷眼と黄仏舞を殴打連行して、半年前の王鐘声を引き合いに出して脅している（『正宗愛国報』一二年五月二〇日「天津中国報詳誌新劇団之風潮」）。

（121）天津『大公報』一一年十二月十二日「稟謝保護」に鐘声を「匪犯優伶」と決めつけたことには、最大限鐘声を侮辱する意図が含まれている。

なお、拙論を書くにあたり、一橋大学の三谷孝教授に御示教いただいた。ここに、深く鳴謝する次第である。

（一橋大学大学院社会学研究科教授）